AN EXPLANATION
OF
THE PHOTOGRAPHS OF THE HOLY LAND

明治三十一年四月

聖地寫眞圖解

敎文館

020931-000-2

特61-871

聖地写真図解

堀田　達治／著

M31

ABI-0780

特61
871

191
586

(1)ヨッパ港の景色

大凡そパレスチナに旅行せし人、即ち所謂る聖地巡拝者は、其のヨッパに上陸せしことを決して忘れざるべし。此港は其水甚だ浅く、大なる船は、海岸を距る半哩以内へとは近づく能はざるほどなり。されば旅客も荷物も共に小舟もて積み卸さゞるべからず。此の櫓を漕ぐ篙師はいと優美にもまた熟練なるが故に此の小舟に乗りて岸にまで達する須臾の間には、怪しげなる棹歌と、調子よき運動に一方ならず興を添へられつゝ、此有名なる港の特色を視察するに、こよなき便宜を得べし。此地暴風雨の起ること甚だ多く、時としては數日の間、上陸を見合せざるべからざることあり、港よりして市街を望むに其景美はしく、家

は急に水邊より隆起して宛がら高臺の上に建て列ねられたるが如し。ヨッパは世界の最も古き都會の一にて或人の考へにては、其名はノアの子なるヤペテより出でたるなりといふ。又傳説によれば、ノアは此地にて其の方舟を造りしとぞ。聖書を讀む人、此の港を見なば、約拿書一〇三にいはゆる「ヨナは……ヨッパに下り行けるが折しもタルシヽへ往く舟に遇ければ」とある昔の直ちに忍ばるゝあるべし。

(2) ヨッパの市場

ヨッパは住民凡そ五千ばかりを有する市にして賑はしく亦騒がし。此の内三百人ばかりは猶太人、一千人ばかりは基督教徒、其他は土耳其人あり。市街凸凹多く、且つ道幅狭きが故に、車を用ふるに由なく、さりとて徒歩する人は如何にも見苦しき亞剌比亞人が、荷物いやが上に積みたる駱駝と驢馬とを追ひ行くに遇ひ、さらぬだに狹き路あれば、之を避くるに困じ果つべし。市場即ち賣買場は路傍の露營に比して僅か優れるかと思はるゝ程のものにて、大なる博覽會の入口の有樣に宛たり、商賈人は銘々其商品を地上に列べ、天蓋を立てゝ日光を遮り、其儼しく坐する狀は百萬金の豪商ぞと言はぬばかりの風情あり。ヨッ

バ近傍の村落は、多くの菓實を産し、取り別け蜜柑は世界中最良のもの也。されば此の露店商の商品も果實その要部を占めたり。若し夫れ此の汚穢しき市街を通行しつゝ、此の美味なる菓物の堆さを打ち見遣り、救ひ主の生れ給ひし地の産物を初めて味はひ來れば、旅客に取りて、奇しくもまた樂しき經驗にてあるなり。

(3) ラムレの市街の景色

ヨツパよりラムレに至るには、其途サロンの野中にあり。サロンの野は、聖地の中にても、屈指の美麗なる、膏腴なる土地にて、菓物と美はしき花と充ち滿ちたり。但し「サロンの薔薇」(歌二〇一)は今日また見るべからず。ラムレに近づきて第一に眼に觸るゝものは、此圖の右方に見ゆる方形の塔なり。其構造はサラセン風にて、高さ凡そ八十呎あり、此頂上よりしてヨツパと海の方とを顧みれば、其景色の美しさ、世にその數多しとも覺えぬばかりなり。今日のラムレは決して非尋常の都にてはあらねど、了得に其名殘りは徃時の壯大、繁昌を現はせり。此地新約時代の舊都アリマテヤにしてイエスの親交を辱ふせし

ヨセフの故郷（太廿七〇五十二）ならんとは、一般に同意せらるゝ説なり。今日は人口凡そ三千人ばかりを有す。昔し十字軍の時には、此地一種特別の注意を惹き、英國の獅心王と稱せらるゝリチャルドは此地を本據として若干の勳功を立てたり。

(4)ラムレの亞剌比亞貴人

亞剌比亞貴人の一種異様なる容貌を見て、第一に感ずるとは、其不信用なるとなり。彼等の様子を見るに、何處として狡猾を露はさゞるとなし。或は亞剌比亞貴人はその人物最も面白く、角力家の善き標本なりと唱ふる人も間々是れあり。成程此の説に符合する例外者もなきにあらねど、そは誠に少數にて、多數は臆病且つ狡猾なり。彼等は往々にして瑣細なる事を長く言ひ爭へども、大聲に罵り合ふのみにて、それより以上に及ぶとは殆んどなし。彼等の多くは一定の住處なく、昔の族長の如くに其天幕を彼處此處にと移すなり。されど其の族長に似たりといふは、只此の一点に止まり、古人の氣高き氣象の面影は更に

なし。外見は非常に遠來の人に懇切にて、其天幕に近づくものある時は「肥えたる犢」を宰り、丁重に待遇せども、此時よく〳〵注意をせずば其馳走の爲めに有てるほどの凡ての貴きものを失ふヿあるべし。

(5) 近時のエルサレム

今日のエルサレムは其の面積凡そ二百〇九「エーカー」あり（凡そ我五万四千五百八十町歩）。周圍は二哩四分ノ一ばかりあり（凡そ我三十三町）。されば一時間以内にして人能く其外廓を一周するヿを得べし。現今の人口は凡そ五万あり、其光榮は既往と將來とにありて現在にあらず。昔し此都の建ちたりし諸の丘陵は、其表面こそ何れも幾變遷を閲したれど、尚は髣髴として之を見分くるヿを得べし。現今のエルサレムは高低甚だしく、其の街衢にして上れる所あり、下れる所あり、平坦なる町とては一も之を見るべからず。家は瓦石堆をなせる上に建てられたるとて、自然の地面よりも、二十呎、三十呎、乃至五十呎

も高きに建てられたるものあり。旅客のエルサレムに近づきて初めて之を遠望するや、只是れ自然石の石垣の乱点するが如く見え、而して彼處此處に天に冲する回々教の尖塔ありて參差れり。家屋はおしなべて一つだに文明の愉快を具へず、市街は狹隘不潔にして、人民は醜貌且つ粗服なり。誠なる哉、救主の言に「視よ爾曹の家は荒地となりて遺されん」（馬太二十三〇三十八）とあるとや。

(6) ヨッパといふ門

此處はおほかた凡ての旅人がエルサレムに入らんとして必ず通る路なり。憾むらくは、此圖にも見ゆる如く、露西亞の大なる修道院あるが故に、此邊の眺望殺風景を極めたり。されど、西洋の人此處に來りて初めて眞の東洋風の一斑を窺ふことを得るなり。此處に万國の人民、無差別に混淆雜糅し、各々の固有の國語を語り、癩者乞食は人の至るを見れば前後左右より附き纒ふ。門を入りて初めて目に觸るゝは、我身の周圍なる石垣なり。其高さは地面の高低に應じて、二十呎なる處あり、六十呎なる處あり、必ずしも一定せず。人之を見る時は、聖書歷史に城の門を仰々しく書きたるとの偶然ならぬを悟るべし。此門の此街に

於けるは、鐵道停車場の近代の各都會に於けるが如し、朋友を迎ふるも此處に於てし、別れを告ぐるも亦此處に於てするなり。我等此の門に立つ時は、聖書の未來記に所謂る「汝の敵汝の一切の邑々を圍み烈しく汝を攻めなやまさん」（申出八〇五十五）との意味を充分に合點するを得るなり。

(7) 露西亞修道院

旅客ヨッパより足を進めて初めてエルサレムを望むべき丘の頂に達すれば、其面前に當りて廣大なる露西亞修道院の立てるを見ん。其位置正しくエルサレムの大部分の觀望を妨ぐるなり。此の修道院はヨッパの門より西北に當れる丘の上にあり、其保護の行屆き、且つ莊嚴なるとエルサレムの城内、城外に類なき數個の建物より成立す。周圍に石垣ありて、此内に教會堂即ち大聖堂あり、男及び女の爲めの數棟の宿坊あり、少くとも一千人の巡拜者を容るゝに差支なき講堂あり。教會堂に上りて四方を眺望すれば、城内及び近傍の村落歴〳〵として眼眸に映ずべし。構内最も面白き見物は、教會堂の傍に立てる巨大の尖塔な

り、此塔は岩を切りて作りたるものにて、高さ凡そ四十二呎、直徑五呎あり。此の一群の建物は時として新エルサレムと稱せらるゝことあり

(8) 聖墓教會堂

世に稱す、此の教會堂はキリストの墓の位置に立てるのみならず、又カルバリーの岩の上に立てるものありと。果して然らば此處は即ちイエス復活の後にマリヤに現はれ給ひし所、アダム、ヨセフ、メルキセデク、ニコデモ、ゴッドフレイ、ボルドウイン、(十字軍の將官)等の墓のある所、鞭撻の柱の一部分のある所、キリストの自由を奪はれし所、女帝ヘレナが眞の十字架ならんと思はるゝものを發見せし所、其他二十餘の歴史上面白き由緒ある古跡なり。羅馬における聖彼得會堂を除く時は、此の會堂は今日存立する宗教的建物の中にて、最も莊嚴なるものとす。堂内の大圓屋は其直徑九十九呎ありて、其の中心に方

り、圓天井の直下に高名ある我等の主の墓あり。(此の墓の眞僞必ずしも保せず)、小さき宮殿ともいふべき形狀にて、間口十呎、奧行二十呎高さ亦二十呎あり。十字架の旗其入口の上に飜へり、復活の美しき畫圖其の下にあり。主の葬られし場所を標する大理石の平石は、其中央に一筋の罅あり、又其緣は巡拜者の唇に接吻せられて滑かに磨損せり。

(9) ソロモンの宮殿

昔の建物にして人の興味と注意を惹きたること此圖に見ゆるものゝ如く甚だしきはあらず。即ち此のソロモンの宮殿はモリヤ山の上に建てり。此山はヱルサレムの南東部にある岩山にして、其頂上は平坦に、且つ高さ石垣もて之を圍めり。此の建物の殊に面白き一点は設計、細目一切皆神の指敎に基きたる幕屋の構造をその儘に摸したると是れなり。尚は此の建築の樣子を詳かにせんと欲せば、列王記上第六章を見るべし。此宮殿の石垣はダマスコ門の近傍なる石切場より切り取りたりと想像せらるゝ白色大理石もて築けり。宮殿の周圍即ち北、西、南の三側面には三階の建物立てり、其高さ各五キユービトあり(凡そ我

が八尺五寸)。又二個庭あり、其内部なる庭は「祭司の庭」と稱せられ、他の一は、外庭または大庭の名あり。此の宮殿はソロモンが之を竣工してより后、存立する事凡そ四百十七年なりしが、紀元前五百八十八年、カルデヤ人のために打ち壊され終りぬ。

(10) ヘロデの宮殿

ヘロデは己れのために、不朽の紀念物を建てんとの願望を起し、之がため、第二の宮殿を破毀し、之を改造してソロモンの宮殿よりも遙かに大きく、遙かに美麗なるものとなせり、其の搆造は今日の大聖堂とは全く似かよへる所なし。境内は周回凡そ半哩ばかり、幾個となく階段相重なりて、其の最高所に本殿立てり。此の本殿は奥行百五十呎、間口一百呎、高さ百五十呎にして、大なる白色の大理石もて造られ、前面は黄金の板を張り詰めたり。内庭は三重の圍の内にありて、之れを婦人の庭、イスラエル人の庭、祭司の庭の三個に小分せり。外圍は所謂る異邦人の庭にして、高き石垣もて之を圍めり。其の廊下は善盡し、

美盡し、屋根は香柏を彫刻したるものにて、之を支ふるに、白色大理石のコリント風の圓柱を以てす。此の柱は一々皆一本石にて長さ凡そ四十呎あり。此の宮殿は紀元七十年に羅馬兵來襲の時打ち壞され終りぬ。

(11) ニロの宮殿

此圖に見ゆる聖殿はハレムと呼ばるゝものにて、之を圍める石垣は、西方の長さ千六百〇一呎、東方千五百三十呎、北方千〇二十四呎、南方九百二十二呎あり。其の入口としては西方に八個の門あり、其中にて最も著名なるは、鏈の門と稱せらるゝもの是れなり。背面にある巨大の建物はエル、アクサと名くる回教寺院にして、想像によれば、皇帝ジャスチン聖母マリヤを崇むとて建築せしものといふ。或人の考へにては此堂も元は基督教の會堂なりしとぞ。此圖の殆んと中央の部にある建物はオマルと名づくる回教寺院にて、其の圓頂閣はエルサレムに於ける最も著名のものとす。その位置は先きにソロモンの宮殿之れ

に立ち、次でヘロデの宮殿の立ちし舊趾あり。此のハーレムの境内なる一点、一石は皆悉く論爭の種子となりしが、探究に探究を盡せし後、其事實分明し今日にては、此の神々しき建物の前に立つもの、如何にも己が身の儼かなる地に在ることを感じ、既往の盛況は幻像となりて、知らず識らず、我が心に浮ばざるはあらざるなり。

(12) オマルの回敎寺院 前面の景

此の驚くべき建物は、回敎徒の誇るほどありて、其の建築自らに、注意すべき價値、充分是れあり、されど基督敎徒に取りての興味は、正しく其のソロモンの宮殿の舊址に立てりといふ點に於て存す。有名なるモリヤ山は即ち此處なり、ダビデが「銀五十シケル」(母後二十四〇廿四)にて買ひ取りし禾場も亦此處なり。其他聖書にある幾百の事件はそれぐ此地と關係あり。此堂の第一階は、正八角形にして、其の直徑凡そ百七十呎、五十六の窗を穿ち、色硝子を張りて華麗いはん方なし。又此の第一階は、高さ四十六呎にして、其の上に高さ三十六呎窓十六個を有する圓形の建物あり、美麗なる圓頂閣は更に此上にあり

て、高さ七十呎、近代のエルサレムに於ては、蓋し最も著名のものとす。更に此の圓頂閣の上に優美なる錐尖あり、之に冠するに鍍金したる新月を以てせり。屋根の外部は樣々なる異色の大理石と、奇異なる形狀の陶器の瓦とを以て葺きたれば、日光此上に輝く時には、虹の各色彩然として光を放ち、人をして昔し曾て此に住ひし一層美麗なる榮光を思はしむ。

(13) オマルの回教寺院　背面の景

此の建物は、紀元六百三十六年エルサレムを略取せしオマルの建てしものなり。初めオマルのエルサレムに入るや、聖墓教會堂にて祈るを好まず、由てソロモンの宮殿の跡を求めたり。斯くて知る人ありてオマルをモリヤ山の頂上に導びき上りしかば、オマル手づから、其處に堆をなせる許多の塵芥を取り除き、ソロモンの智慧ならでは建て難きほどの建物を建つべきことを命令せりといふ。此の堂は、回教信徒に取りてはメッカとメヂナに次ぐ神聖の地にして、十字軍の爲めに略取せられし時には、回教信徒等防禦の爲め「宮殿の衛兵」なる特別護衛隊を組織せり。堂内最も有名の一物はモリア山の頂上を標記する巖是

れあり。回教徒の傳説によれば、此巖モリア山の絶頂にありて、數呎の空中に懸りたりしといふ。回教徒は信ずらく、世界の凡ての水は、皆此の巖の下より流れ出づるなりと。又此處に「尊き洞穴」あり、此中に大理石の星ありて「地獄」の入口を塞げるものなりと稱せらる。

(14) 巖の堂

オマルの回教寺院はエルサレムに於ける最も著名の建物にして、其の大圓形堂の直下に位する聖巖は此の建物の中の最も著名なる一物なり。此巖は灰色の炭酸石灰質にして、長さ六十呎、幅五十五呎、床の上、五呎ばかりの處にあり。之を圍むに十二本の圓柱と、鉄製の柵を以てし、絹地の幕その上に懸れり。此巖にモハメットの足跡と稱せらるゝものあり、傳説によれば、彼が天に上らんとして最後に足を觸れし地は即ち是れなりとぞ。又天使ガブリエルの手の痕と稱するものも此の聖所中の奇物の一に數へらる。されど昔しアブラハム其子イサクを縛し、之を犧牲として神壇に載せたるは即ち此處なるを思へば、聖書の

読者にとりては、以上諸の奇聞は寧ろいふに足らざるなり、（創世記二十二章）。第一の神殿の時も、第二の神殿の時も、燔祭の神壇は何れも此處に建てられたり。（代下四〇二）。回教徒は信ずらく、此の巌は永久の奇蹟として、何時までもモリヤ山の頂上、七呎の空中に懸るべしと。

(15) エル、アクサの回教寺院　外部

此堂はオマルの會堂と大方同様に尊敬せられ、二堂相合して一大殿堂を成すものと看做さるゝなり。エル、アクサとは最も遠しといふの義にして、メッカおよびメヂナの如き他の聖所を區別するために命ぜられたる名なり、此の建物の起原に就ては稍疑あり、されど、通例はジヤスチニアン帝が聖母マリアを崇むとて造營したる華麗なるバシリカと同物ならんと想像せらる、よし同物ならずとするも、少くとも其舊趾ならんと想像せらる。此の堂は神殿の境内西南隅にありて、南側の石垣に接し、其の面積は五万平方呎あり（凡そ我千四百坪）。建物の形は長方形をなし、長さ二百八十呎、幅百八十呎あり。其の玄關は北方

に面し、其幅は建物の幅と相等しく、七個の入口ありて各之を弓狀にし、細き柱を以て之を支ふ。床は大理石を以て敷き詰め、之に上る石階は、千二百年間の人跡に磨り減されて滑かに成れり。堂は通常の回敎風によりて裝飾極めて華麗に、廊下と床とは大理石を以て疊み、窓には色硝子を張り、又亞剌比亞の玩弄的裝飾品を陳列せり。

(16) エル、アクサの回敎寺院 內部

エル、アクサの內部は、大中堂と、左右兩側の各三室と、圓頂閣を設けたる內陣より成る。此の圓頂閣の內部と恰かも其下ある空處とは、嵌工と大理石の外被を以て美々しく裝飾せり。又圓頂閣の下に木造の講壇あり、其彫刻妙を極め、之れに象牙と眞珠母とを嵌めたり。此の講壇の背後に石あり、キリストの玉趾の跡を印せりと稱せらる。又此傍に可なり密接せる二の柱あり、回敎徒はいふ、此の二の柱の間を通過するを得る人にして初めて天國に達するを得べしと。此處にまた木葉の井と稱する井あり、此名の由來を尋ぬるに、今より數百年の昔一人の信心深き者ありけり、取り落せし水桶を發見すとて、井戸の底

に下りしに、樂園に通ずる一の門あるを見付け即ち此内に入れり。斯くて此者、樂園の木の葉一枚を摘み取り、再び取て還せしが、其葉生々として色を變へざりしかば、此葉の樂園にありし證據、疑ふべくもあらざりしとぞ。此門それより後に誰一人、發見せしものもあらざれども、回教徒は尚ほも此井を樂園に通ずる入口の一と思へり。

(17) エル、アクサの背面——橄欖山の遠景

此圖に見ゆる石垣は、第十五圖、第十六圖に記せし善美なる會堂の背面にあるものなり。基督教徒の聖地巡拜者に最も趣味あるものは、此の表面に見ゆるものにあらで、即ち此の石垣の下に通ずる驚くべき墜道にぞある、こは疑ひもなく舊との神殿の石細工の一部分にて、石も柱も一としてソロモン時代の痕跡を有せざるはなし。回教徒の傳説によるに、世界審判の日には此圖に見ゆる石垣の上にモハメツド其座を構へ、而して細き繩を橄欖山にまで張り渡すべし。其時すべての人、各己が罪を負ひながら、此繩の上を渡らざるべからず。斯くて罪ある人は、其間なる淵に陷ゐるべく、之に反して義人は天使の手に支へ

らるべし。紀元一千百十九年に、基督信徒たるボルドウイン第二世と呼ばれたる國王、其の部下のものに此の美麗なるエル、アクサの會堂を與へたり。此の賜物ぞ即ち有名なる「宮殿の衛兵隊」の宮を成せし始なりける。

(18) ハラムの石垣

宮殿の境內と言ひ傳へらるゝものゝ面積は、三十「エーカー」以上、四十「エーカー」以下にして(凡そ我四千町歩)之を廻れる石垣は、外部にありては五十呎より八十呎、內部にありては十呎より十五呎、土地の高低によりて其差あり。此の石垣の最も古き部分は、巨大なる石を以て成れども、其稍新しき部分は、石材も小さく、其工も又劣れり。今此圖を以て見る時は、如何ほど輕躁の觀察者も、石細工は新らしく、弓狀門は稍古風なるを判別するを得べし。されど其他の多くの部分は、熟練の眼と心となくんば、此の相違を看破する能はざるなり。此の石垣の南西隅は、地面の俄かに凹陷したるに原因して、下層の石

幾分か露出せり。重もなる首石は第一の神殿建築の時に、ソロモンが手づから居ゑしものなりと信ぜらる。其長さ三十一呎、幅七呎、高さ五呎あり。若し夫れ充分の時日を有せらるゝ旅行者には、エルサレムを研究するに於て、此石蓋し、最も有益なる問題の一たるべし。

(19) 聖ステパノの門

此景は聖ステパノの門を經てエルサレムを出づる時に目に入る所のものなり。我儕が主の最後の審問の場所は、アントニヤの塔にして、此所を距ると遠からざるが故に、刑吏等イエスを曳き行くに、郡集雜沓の街を通らず、其の最近の出口たる此處より曳き出せしと、頗る信ずべきに似たり。されば我等此に立つ時は、カルバリ山の所在地と相距ること、遠からず。昔し神の聖子が觳觫として十字架を負ひつゝ屠所へと歩ませ給ひし玉趾の跡、此所にてそあるべけれ。此の門外に峻しき一の丘あり、此處ぞステパノが苦を受けて教に殉し、「主よ此罪を彼等に負しむる勿れ」と祈りつゝ「寢に就き」(徒七〇六十)し古跡なる。

此の古跡を表すとて、路傍に一の巨大なる石灰岩あり、此岩には數條の赤き脈見ゆ。此の脈即ちステパノの流せる血より生じたるものなりと信ずる人もあり。

(20)ヴイア、ドロロサ――悲しき道

此の町は其幅甚だ狹く、曲り彎りて石の敷方また粗なれども、聖ステパノ門近傍より聖墓教會堂に通ずる、格別の由緒ある町なり。其名は昔の羅馬のヴイア、サクラ(聖き道)よりも、將た又ダマスコの「直と云る街」(徒九〇十一)よりも遙かに能く人に知らる。其暗くして欝陶しき有様は能く其名に應へり。其の周圍の事情は一として之を高名ならしめし天主教僧侶の傳説と相符合せざるはなし。イエスの悄然として、此處を通り、刑場指して足を運び給ふや、八の出來事あり、されば天主教僧侶等その紀念すとて此の町の中に八の屯所を設けたり。此の八ヶ所の中にて最も能く人に知らるゝものは、「鞭撻の教會」とてイ

エスが鞭たれし塲處なりといふものと、ピラトが「觀よ此その人あり」といひし處あるエクセ、ホモの弓狀門にぞある。此の弓狀門は奇巧にして且つ古く、ノアの時代より立てるものにもやと思はるゝばかりあり。此町は第十四世紀頃までは、人に知られざりしなれど、代々の巡拜者が懷奮の淚に咽びし聖地なりといふ一事は、一種人心に感動を與ふるに足る。

(21) エクセ、ホモ弓狀門

ピラトの館と鞭撻の敎會とを過ぐれば、直ちに有名なるエクセ、ホモ弓狀門を見ん、此門非常に高くして街上に跨がり、其狀甚だ奇にして、洪水の時より建てるにもやと思はるゝばかりに古し。此上に一箇の室あり、其窓よりして臨めば、悉く市街を見ることを得。傳說にいふ、是れピラトが紫の袍を着、棘の冕をかぶりたるイエスを外に曳出し、鮮血を見ること渴するが如き群衆に對し「我かれに就て罪あるを見ず之を知せんとて爾曹に曳出せり」（約十九〇四）といひし舌の根の尙は乾かざるに、また「觀よ此その人なり」といひし舊跡なりと。此の門の傍に若干の天然岩あり、荒蕪廢殘此市の如きにありては、異常の事

實ありとす。世に稱す、此の門は審判の庭と直ちに連續し居たりと。此の近傍にイエスもはや十字架を負ふの力盡き、クレネのシモンが强ゐて之を負はせられし舊跡と言ひ做さるゝ處あり。

(22)ヴイア、ドロロサ第五の屯所

此の圖を見る人、此の聖なる路筋の如何に狹く、如何に粗惡なるかを幾分か合點せらるべし。頭上にかゝる多くの弓狀門は日光を遮りて欝陶しさ限りなく、坐ろに此の場所に就て言囃さるゝ慘憺の事情を思ひ起さしむ。此の路筋の一部分に所謂る「富める人の家」あり、是れ路加傳十六章に見ゆる主の話の富める人の住める跡なりとぞ。此家の前に、石あり、ラザロ此上に座して食を乞ひしといふ。之に次でヴエロニカの家なるものあり、天主敎僧侶の傳說によれば、イエス此處を過ぎし時、ヴエロニカその顏の汗と血を拭ふ爲めにとて手巾を奉りしといふ。此の手巾のヴエロニカに返へさるゝや、イエスの容貌其の表

にあり〳〵と影を止め居たりしとぞ。此の近傍なる石垣に一の凹所あり、こはイエス其身を支ふとて凭れし時、其肩の痕跡、形の如くありしものといふ。またイエスが泣きながら從ひ來れる婦人等を顧りみ、「エルサレムの女子よ、我が爲に哭くなかれ惟己と己が子の爲に哭け」（路廿三〇廿八）といひし所も、眞しやかに、此の傍に指定せらる。

(23) ヴイア、トロロサ第九の屯所

此圖に見ゆる建物は、コプト人（エジプト人）の修道院にして、所謂る聖墓教會てふ廣大なる建物の一部を成し、ヴイア、ドロロサを經て達せらるゝ處なり。此修道院の中に、信心深き巡拜者の爲めにとて設けたる幾多の小房あり。此に日夜を過ごす修道者等は、堅き岩を截り成せる、聖ヘレナの池の鍵を有す。此に其の教會の禮拜を執行するコプト人の祭司は、全く聖書に通せず、只四福音書と詩篇若干とを知るのみ。又彼等はコプト語は讀み得れど、之を了解すると能はず、其道德は不幸にも其の神學と等しく鄙俗を極む、彼等は非常に貪婪にして、人を欺くを意とせず。乞食をなして其生計を立つ。其の甚しきに至りて

は、過度に酒を飲む。飲酒は誠に彼等の痼疾なり。昔し苦難の救主が其玉趾もて聖め給ひし此の場所に、不肖なる此等の弟子ありて其亂行に之を瀆すを見る人、心に顰蹙の感なくんばあらず。

(24)聖墓教會の內部

此の會堂に入りて第一に感ずることは、欝陶しくも又廣大なることなり。キリストの死と復活とに關係ありと持囃さるゝ舊跡の、此中に存するもの、都て七十を下らず。目觸るゝ所禮拜堂あり、墳墓あり、祭壇あり、秘密と欝憂を罩めたる舊跡あり。中にも聖墓そのものは、恰も大圓頂格の直下にありて、即ち興味一に玆に集まる。白き大理石を以て築造し、長さ二十六呎、幅十八呎、之を大小二區に分割し、其大なる方を天使の禮拜堂といふ。此の中央は天使がイエスの復活を公告せし時に立ちたる舊跡ありとぞ。此の入口の上に美麗なる甦の圖あり、是れ古今屈指の名畫にして、片足を墓の上に立て、將に起き上ら

んとするの様を描けり。又小なる部分は即ち墳墓本部にして、床よりも凡そ二呎ほど高き一の棚あり、イエスの遺體は此に置かれたりしと稱せらる。此の全部、其の粧飾頗る華麗にして、岩の元形は全く見分くべくもなし。

(25) 鞭撻教會の内部

聖ステバノ門よりヴイア、ドロロサに入り、ピラトの館を過ぐれば、此處は、其名も鞭撻の教會とて、大に由緒ある建物なり。之に入りて見廻はすに、其最も美麗なるものは、祭壇と其周圍にして、即ち此圖に描き出せしもの是れなり。聖書にピラトの前より、「兵卒これを公廳に携行き」種々なる侮辱を加へ、「葦を以て其頭を撃き且唾せり」(可十五〇十四)とあり。此の所謂る公廳は思ふにピラトの館の一部分なりしなるべく、而して鞭撻の教會は、此のピラトの館と相對して立ちたれども、昔しは廊下を以て接續せしめたるべきが故に、此處をイエスが殘酷なる苛責に遇ひし舊跡とするも大に其理あり。此点に就て好

都合あれば一言せんに、鞭撻の柱の一部分といふもの聖墓教會の堂內にあり。此の聖なる遺物は、柵內に安置せられて、巡拜者接吻せんとするも得べからず。されば一僧、柵の邊に立ちて、長き捧を此柱に觸れそを差出して巡拜者等の接吻するに任す。

(26) 聖アンの教會

聖アンの教會は、エルサレムに其數多き「聖所」の一なり。ヴイア、ドロロサの東端聖ステパノ門の近傍にあり。是れ處女マリアの母、聖アン女が住居をりしと持囃さるゝ處なり。傳說によれば、聖母マリアは此處に生れたるなりとぞ。又此處は「婦人の中にて福あるものあり」と、稱せられしマリアの父、ヨアキムの葬られし處と稱せらる。此の教會堂は、第七世紀に建築せられ、又第十二世紀に再建せられたり。其後も度々の修繕を經、許多の變更を受けたれば、其何れの部分を問はず、當初の設計、若しくは式樣を悟ること容易ならずとす。一千八百五十六年クリミヤ戰爭の終りに當り、土耳其皇帝その會堂を佛帝ナポ

レオン第三世に寄贈せり。

(27) ヘロデの宮殿に到る街路

エルサレムの見物は、甚だ煩はしくして、少しも面白きことなし。此の理由は種々ある中に、今此圖を見る人は即ちその幾分かを明らむるを得べし。其の市街は狹く、汚く、且つ非常に粗惡にして、幾個となく路を掩ふ弓狀門は、徒らに濕潤、且つ暗黑ならしむるのみ。夜分などは提燈なくして歩行すると、殆んど叶はず、或は眠れる犬に躓づくことあるべく、或は同じ巡拜者仲間に鉢合せするの恐れあり。時としては、乘馬にて市內の各街衢を通行せんとする人あれども、途中屢々下馬せざるべからざるの必要ありて、其決して上策ならざるを悟るなり。此圖に見ゆるは、ヘロデの宮殿に至るの街路なり。尚ほ此のエル

サレム市内肝要なる町二三を擧ぐれは、ヨッパ門より神殿の境内に通ずる「ダビデの街」、聖墓教會に通ずる「キリスト信徒街」、シヲン門に通ずる「預言者ダビデ門の街」是れなり。之を要するに、パレスチナに於ては、何れの市を問はず、西洋文明人の街路と稱せらるべきほどの街路を發見するは困難のことなりとす。

(28) ベニヤミンの子孫

こゝに見ゆるものは、ヤコブの末子なるベニヤミンの子孫なり。其特徴は即ち頭髮の耳の上に蔽ひかゝると是れなり。彼等は、非常に自己の種族を誇り、又其の歴史を誇る。聖書の記事に基づきて考へ合はするに、彼等の著しき特性は、猛烈と頑固と剛勇とにありし如し。されど其種族の剽悍なると、其の先祖の温和なると、性質全く反對なるとは、夙に著述家の認めたる所なり。ベニヤミンの名は、耶利米亞二十章二に見ゆる「上のベニヤミンの門」により、今もエルサレムに殘り傳はれり。人若し是等紛ひもなきイスラエル人と談話を交ふれば、自ら其祖先の偉業を熟知し、且つ他の種族よりも一層多くイスラエ

ルの血統を有せるとを以て自ら許せるを悟るべし。今聖書によりてベニヤミンの子孫の有名なるものを求むるに、「ベニヤミンの支派キスの子サウロ」（母前九〇一、二）の如き、又モルデカイ（帖二〇五）の如き即ち是れなり。されど中にも最も善く知られしは、己れに就て「イスラエルの族、ベニヤミンの支派」（腓三〇五）といひしパウロ其人にぞある。さればベニヤミンの支派はイスラエルに最初の王を與へ、基督教に異邦人の大使徒を與へたる名譽を有するものなり。

(29) 黄金の門

此の嚴乘なる門の建築の時日は詳かならず。或人は其特別に美麗なるより推察して、昔しペテロとヨハネが跛を癒せし處なる（徒三〇二）美しき門なりといふ。されど我等の記憶せざるべからざるは、彼は殿の門なるに、是は市の門なると是れなり。或人は謂へらく、此門はヘロデ大王の時に建てられしものなりと。又或人は否コンスタンチンの時なりといふ。現今は此門石垣を以て圍みたれど、尙は其高き位地にあると、美麗なるよりして常に人の注意を惹く。旅客若し之れに登臨すれば、橄欖山の美景とキドロンの漾々たる流れを視るを得べし。周圍の石垣は、其長さ五十五呎に亘り、而して門は此の石垣よりも六

呎高し、此門は二個の小門より成り、何れも麗しく飾れる弓状の頂を有す。門の内に、大なる、又美しき建築の一室あり、磨き立てたる大理石の精巧なる圓柱と、意匠を凝せる弓状門とを以て之を支へたり。之を要するに、全体の構造如何にも古雅、艶麗にして能く旅客の心目を慰むるに足り、轉た新エルサレムの金門の美麗を想起せざるを得ざらしむ。(默二十一〇二)

(30) 猶太人の哀哭場

此處はソロモンの神殿の元の石垣の一部分に添へる、小さき町にて、旅人の此處に赴くものは、悲哀の感に滿ちて其歸途に就かざるはなし此處に數箇の大なる石ありて、一は年數の古きにより、一は此に參詣するものゝ唇と手とにより、大に磨損せるを見る。此等の石の中、長さ十五呎、高さ四五呎に及ぶものあり。ユダヤ人の此處に參詣するもの常に絶へざれど、特に金曜日に多く、而して夥しき群衆は樣々なる修行をなしつゝあり。彼等は皆其手に希伯來語の聖書の一部分を携ふると覺し。斯くて時としては一齊に之を朗誦することあり、又交る〳〵之を讀むことあり。或ものは折り返し、繰り返へし石に近づき、口を其

裂口にあてゝ、いと哀れげにエレミヤの哀歌の或部を口號む。昔しは此土の主權をも握りし人の子孫が、今は街頭に低頭し、其壓制者の蔭に平伏する樣、パレスチナ國中、是れより無殘の光景あし。歷史の天下後世に垂るゝ教訓にして最も嚴かなるものとしいはゞ、エルサレムの石の上に哭する猶太人に過ぎたるはあらざるあり。

(31) ヒゼキヤの池

これは聖市中最も古き泉にしてヨッパ門の直ぐ内にあり、四方は全く人家を以て圍まれたり。其濁りて不潔なるを見れば、人をして泉なるよりは寧ろ溜池あるべしと思はしむ。現今此池は回教徒の浴場に充てらる。エルサレム市中古跡として信を置くに足る場處の一あり。歷代志略下三十二章三十にヒゼキヤに就て記すらく、「ヒゼキヤはギホンの水の上の源を塞ぎてこれを下より眞直にダビデの邑の西の方に引けり」と。ヒゼキアの此の工事を成すや、非常に巧みなるものありしと見え今日探撿家の熟練を以てして尙はギホンの水源を見屆くる能はざるあり。ヒゼキアの池は長さ二百五十呎、幅百五十呎、深さ凡そ十八呎あ

りて、優に聖市の半分に供給すべき水量を保つに足る。常時には其水六呎乃至八呎を超えず。此の水道工事は、最も巧妙を極めたるが故にエルサレムは幾度重圍の中に陷ゐるも、城内のもの未だ曾て水の欠乏を感ぜしとなかりしは、往々人の唱ふる所なり。

(32) 街路の光景

エルサレムは「稠くつらなりたる」邑なるが故に（詩百廿二〇三）巡拜者は此の城内に於て、互ひに見失ふが如き危險は殆んど是れあらず即ち此圖を見ても知らるゝ如く、其街衢は狹隘なる街にして、其幅は十二呎を超えず、別に人道の設けあるにあらざるを以て、人畜同じ路を歩むなり。家は只管價の廉なると、便宜とを主として建築せられ、一として建築上の美を具ふるものなきが故に、巡拜者の目は自然に其の單調なる石垣を離れ、通行人の種々奇異なる容貌にとは轉ずるなりさてエルサレムは世界各國民の集まる所なれば、僅か數歩の内に殆んど万國の代表者に邂近するを得べし。市内に於て勞作に從事するもの

は比較的に少く人民多くは施濟によりて其生計を立つ。されば旅客は「時間を殺す」に倦み果てたる多くの怠惰者に遇ふべし。今この圖は、人民普通の樣子と衣服との一斑を示すものなり。

(33) ヨシヤパテの谷

此谷にはエルサレムの周圍にある最も神聖の地あり。是れエルサレムの東側の石垣と、橄欖山との間に介まれる深き峽にして、其深き溪谷は遙かにエルサレムの南東なるギホンの谷と相接す。主の時代には、此處に柘榴、蜜柑、橄欖等の園ありたるなり。而して主が悲嘆の聖所たるゲツセマネは實に其奧の最も暗き所にありたるなり。此谷に猶太人の墓地あり。苟もアブラハムの子孫たる以上は、其愛國の精神よりして、皆此の谷間に墳墓の地を求めざるはなきなり。今此圖の前景に最も著明なる墳墓三基あり。右に見ゆるものは、即ち是れザカリアの墳墓なり。されど嚴密にいふ時は、此の墳墓別に内部の室を有せざる

が故に、未だ以て墳墓とはいふべからず。是れ只實岩を截り取りたる方二十呎の紀念碑たるに止まる。中央に見ゆるは聖ヤコブの墓にて是は窓の如くに岩を切り開き、之を支ふるに二本の柱を以てせり。此の背後には廣大なる穴數箇あり。左方に見ゆるはアブサロムの墓なり。こは次の圖に於て、更に之を詳にすべし。

(34) アブサロムの墓

是は此の墓の谷にても最も著明なるものなり。撒母耳後書十八章十八節を見るに、アブサロム「己の爲に王の谷に表柱を建たり」とあり。或人は謂へらく、此谷は即ち其の所謂る「王の谷」に當るが故に、此圖に見ゆる墓は、即ち在來の表柱に改造、修飾を加へしものなるべしと。此墓の低部は方二十二呎にして實岩を截り成したるものなり。又上部は大石を以て作りたり。而して此の全体の高さは五十呎あり。底部は內、虛空にして室をなし、其入口の戶は表柱の上にあり。此の堅牢なる建物に、一の大なる損所の見ゆるは、是れ多くの石を投げ付けしによりて生じたるものなり。其脚部に小石の堆かく見ゆるは、是れ

猶太人の習慣として、子の父に對して反逆したるを惡むの餘りに出でたるものなり。此の建築の時代は詳かならず。其の建築法は、ギリシャと羅馬と埃及の風を結合したるものなり。

(35) シロアムの池

此池は有名なる歴史的の古跡にして、地下の通路により、ヨシャパテの谷底に沿ふて上方に一千呎を距てたる「聖母の泉」(四十四の圖を見よ)と相連絡せり。此池は幅廿呎長さ五十呎あり此の最寄に今尚は散在せる石柱の少からぬより見れば、昔しは美はしき建物もて之を掩ひたりしと明かなり。現今は、全く開放して掩ふ所なく、只生石もて石垣を廻らしたるのみ。其水は最も冷く、且つ愉快なるが故に、行き疲れて塵垢に塗れたる旅人に取りては、こよなき好休憩所なり。昔しネヘミヤが「シロの池」のほとりと記せし(尼三〇十五)王の園とは、即ち此處なるべしとは、是れ一般に想像する所なり。されど此池と關係

したる聖書の話の中、最も面白きものは約翰傳九章六、七兩節に記せらるゝもの即ち是れなり。即ち同處にイエスに就て記していふ「その泥を瞽者の目に塗り彼に曰けるはシロアムの池に往て洗へ、彼すなはち往て洗ひ目見ことを得て歸れり」と

(36) シロアムの村

此村は「礙躓の山」と呼ばるゝ嶮しき丘に向へるシロアムの谷の東側にあり。其の人家は大抵皆洞穴即ち地窖にして、元は埋葬所に充てられしものなり。此の活きながらの墓所に、汚るしき亞剌比亞人數百人あり。人若し此の異風ある家の内部を覗き見るが如きことあらば、其内なる者、先づ荒らかなる聲を發し隣人また之に應じ、恰かも猛犬の小屋を騷がせしかとも思はるゝ有樣に立ち至るべし。背景にあるは所謂る「礙躓の山」にて、一名「汚辱の山」また「腐敗の山」と稱せらる。是等の名は、昔しソロモン此にモロクとケモシの爲に祭壇を築き、之に犧牲を献げし古事によりて命ずる所なり（王上十一〇四—八）。其天

然の有様も其名に背かず、荒廢して其頂上には一草一木だも生ぜざるなり。路加傳十三章四節に記載せらるゝシロアムの町は此村より遠からざる所に立てりしものならざるべからず。此下なる谷間にミルトンの記せし小河の溝存す、是れ以賽亞八章六に見ゆるシロアの水ならんと稱せらるゝ所なり。

(37) ダビデの墓

シオンの門を出れば、直ぐに一の小き回教堂あり、其の優美なる尖高塔は、南方よりエルサレムに近づく旅客の注意に漏るゝことては是れあらざるなり。是の教堂の下に所謂るダビデの墓あり。こはイスラエルの歌仙（母后廿三〇一）の遺骸を葬りし場處ならんとは、基督教徒も、猶太人も、回教徒も等しく一致する所なり。ヨセフアスのいふ所によるに、ソロモンは此に非常に盛大華麗の式を以て其の父を葬りしといふ。キリスト降世の少し前に方り、此の陵墓一旦賊の爲めに掠められ、三千「タレント」の銀貨その中より取り去られたり。使徒行傳二章二十九にペテロ、ダビデに就て言へるとあり「其墓は今日に至る

まで我儕の中にあり」と。キリスト教徒は之を見物するを許されざるが故に、明細に之を説明するに由なし。特許を得て之を見たる人の記にいふ「墓は打見たる所、粗石の巨大なる石棺にて、之を掩ふに青色の花氈に美々しき金絲の縫箔を施せしものを以てせり。亦室の一方の入口は黒の天鵞絨氈を以て蔽ひたるが、彼等のいふ所にては、此處より地下室に通ずるなり。其傍なる窓には小さき常夜燈ありて懸れり」

(38)暴議の丘の頂上

暴議の丘は、暗澹蔚幽たるゲヘンナの谷の南端より起り、其四邊は全く墓を以て掩はる、而して無宿舍、及び避難者は皆此の墓を以て其住家とはなすなり。丘の半腹に銀三十を以て買ひたりといふ「陶工の田」あり（太廿七〇六、七）。此丘のかゝる名を得たるは、昔しユダヤ人及び祭司の長等、此處にありしカヤパの別莊に集まり、如何にしてイエスを捕へ、又之を殺すべきかを謀議したりとの傳說に由來す。丘の頂上に小さき禮拜堂あり、その秘密會の開かれし家の跡なりと想像せらるゝ所に立てり。其旁に形醜く、節多く、且つ裂けたる一本の橄欖樹あり、天主教僧侶はいふ、是れ彼のユダが自ら縊れて死したる其樹

なりと。抑も此の丘を以て、かほど大事の集議の古跡ありとする傳説は、僅かに第十四世紀より初まりたることなり。されば案内僧のいふ所を聞く人、皆之を一笑に付し去れども、四邊の光景、如何にも荒凉、慘澹を極むるを見ては、誰しも其身の特に天より咀はれし地に立てることを感ぜざるはあらざるなり。

(39) ゲツセマネと橄欖山

我等今日のエルサレムの市街及び家屋の間を通行する時は、疑惑不審の念、交々心に生じ來るべきも、若し聖ステパノの門を出でゝ嶮しき坂路を下り、水枯れたるケドロン河の跡を渉れば、はや主の玉趾の步ませ給ひし其岩を我も今踏みつゝあるものとの感覺確かに成り行くべし。此圖に見ゆる所は、神聖なるゲツセマネ園の搆内にして、多分は「キリストの靈魂の磔殺地」と稱せらるゝ昔のゲツセマネの園の跡に相違はらじ。而して此山の確かに昔の橄欖山なることに至りては、一毫ばかりも疑ふべからず。エルサレムを建てしものは人間なるも、橄欖山を造りしものは神なればなり。イエスは祈禱のため、又冥想の爲め、

或は一人にて、或は其弟子と共に、常に此谷と此山に赴き給へり。イエスは此園に見へたる中の或る處に座し、其弟子に對して或時はエルサレムの滅亡を說き、或時は「十人の童女」の譬へ(太廿五〇一以下)「銀五千」の譬へ(太廿五〇十五以下)を語らせ給ひしなり。今日此山上に存する最も珍らしき紀念物は傳說に、イエスが主の祈を敎へし舊跡なりと稱せらるゝ場所に建てる建物にぞある。此中に主の祈りを世界各國の言にて書したる許多の石あり。

(40) ゲツセマネの園

エルサレム附近の古跡中、基督敎徒たる旅客に取りて最も貴く覺ゆるもの此の神聖なる花園に過ぎたるはなし。園は高き石垣を以て之を圍み、唯一箇の入口を通じ、之に低き門を作れり。境內凡そ一百五十方呎ありて之を四部に區分し、各部に生籬を廻らし、灌木、花卉を植ゑたり。園內、節くれたる橄欖の老樹八本立てり。案內僧はいふ、こは是れ救主の時代より存するものなりと、思ふに是れイエスが其下に非常の苦痛を受け給ひしといふなる彼の橄欖樹の子孫などにてあるべし。石垣の內に、諸所に祈禱の場所あり、各之を標するに小さき繪を以てせり。案內僧は救主の苦みし洞穴、弟子等の眠りし石地、ユダが主に

遇ふて、反逆の接吻をなせし舊跡を順次旅客に指示す。思ふにパレスラナ全國中にて得らるゝ最も面白き、最も美麗の紀念物としいはゞ此の聖園にて摘みたる花の、小さき花束に過ぎたるはあらじ。苟も此舊跡に立ちて尚は今昔の感を動かさゞるほどの人は、寔に頑癖無情の人とこそいふべけれ。

(41) ケドロン川

此川はヱルサレムと橄欖山の間にありてヨシャパテの谷間を流る。今日にては、冬時の雨に際して俄かに急流となることもあれど、平常は水枯れて、僅かに時々大水の漲溢せし痕跡を止むるに過ぎず。然るに此の地下深き處に水の流るゝ音宛がら手に取る如く聞えしこと屢々ありて、實地に之が發掘を試みたるに果して一條の地下川を發見せり。思ふに昔しパレステナに於ては、雨の降ること今日よりも頻繁にて、其頃は此川の流れも、遙かに大なりしならん。聖書の研究者は、ダビデヱルサレムを出奔する時に此川を渉りしことを想起するならん、即ち撒母耳後書十五章二十三にいふ「王もまたキデロン河を渡りて進みたり」

と。尙は是よりも宛然と思ひ出さるゝは、イエスが賣さるゝ夜の話なり。即ち約翰傳十八章一にいふ、「イエスその弟子と偕に出でケデロンの河を渉りその處にある園の中に弟子と偕に入ぬ」と。此の河原に添ふて老橄欖樹の蓊欝たる茂林あり。日中暑き時にはエルサレムの市民此を以て其好き避暑地となす。我等此處に休らへば、イエスも亦此處に來り給ひて多くの時を冥想と祈禱に費し給ひしを感ぜずんばあらず

(42) ベテスダの池

ベテスダとは矜恤の家の義又流るゝ水の家の義なり、エルサレムの石垣の內、聖ステパノ門の附近、ハラムの北東に方りてバーケット、イズライルと稱せらるゝ大なる溜池あり、これぞ昔のベテスダを代表するものなるべしと、稱せらる。此の溜池は長さ三百六十呎、幅百三十呎、深さ五十呎あり。主御在世の頃にありては聖ヨハネの記せし如く此に「五の廊」ありて、「病者、瞽者、跛者、また衰へたる者など多く臥居て水の動くを待ち」たりしと覺し。イエスが「三十八年病たる人」に、起よ床を取收て行めと、宣ひしは即ち此處なり。此池今は何等の搆もなく、半ば塵を以て滿たされたれば、約翰傳五章四節に所謂る

「天使時々池に下りて水を動かすことあり水の動けるのち先ちて池に入し者は何の病によらず愈へたり」といふ光景を心にそれと思ひ浮ぶること難きはどあり。

(43) 橄欖山よりエルサレムを望む

エルサレムを眺望するには、此山の頂よりするに如くはなし。エルサレムより此山の麓までは一千呎、また絶頂までは凡そ半哩なり。モリヤ山の地平より高きこと確かに百三十呎あり。エルサレムは殆んど我が脚下にあるかとも思はれ、空氣極めて清淨にして、其畫圖の如き景色は人をして長く忘るゝ能はざらしむ。東方を望めば、エリコとベタニヤ、ヨルダンの谷とモアブの遠山、皆指顧の中にあり。ヨルダンの流れは綠の絲を曳けるかとも見へて、遙かに死海の水の見ゆる所までも、其末を見極むるとを得。轉じて南方を見れば、ヘブロン方面一帶の地、眼中に落ちて、様々なる興趣を現はせり。エルサレム市中に於て

最も近き、最も著名の觀物としいはゞ、即ちハレム搆內なる諸々の建物是れなり。人若し親しく其建物の間を徘徊する時には、其大きさ、其地位共に確かに悟るを得ざれども、此山よりして之を望めば、明了に其壯觀を見るを得るなり。

(44)聖母の泉

モリヤ山の山續きなるオペル山の麓、シロアム村の附近に、隧道狀の穴あり、其深さは二十呎乃至三十呎にして、稱して聖母の泉といふ。此水ある處に至るには二重の階段あり、兩段併せて都合三十級あり。此泉は地下の水路によりてシロアムの池と相通ず。(三十五圖)を見よ其水時々干滿あるによりて、「龍の泉」と稱せらる、是れ土人等は此の洞穴の何處かに龍の住ひ居りて、其目の醒めたる時、水の流を止むるならんと迷信し、さては此稱あるに至りしなり。或は此水の源たる泉は神殿の境內の下にありと信ずる人あり。尙ほ此の泉の名稱に就ては、種々の昔譚あり。傳說にいふ、イエスの母此處にて其嬰兒の襁褓を洗

ひたりと。又他の說によれば、姦淫罪を犯せるもの、若し此水を飲むときは立ちどころに死すべし。されば聖母も姦淫の嫌疑を受けたりし際、此の泉の水を飲みて其潔白なるとの證據を立てたりとぞ。

(45) ダマスコ門

此門の搆造は、楕圓形の弓狀門にして、巨大の鉄扉を具ふるが故に、一見恰かも牢獄の如し。其兩側には巖乘なる塔あり、幾多の星霜を經たるべき夥多の徵證歷然たり。此の塔と、門の直ぐ上なる石垣とは、何れも多くの小塔と凸字壁とを戴けり。之が爲め、現今のエルサレムの石垣に穿ち付けたる凡ての門の中にても、此門最も壯大の觀あり。其裝飾は一々皆サラセン風の建築法を顯はせり。故に此建築は比較的近代のものなりといへども多分は在來の門の跡へ建てたるものなるべし。有名なる北方の街道は、即ち此門を起點となす、昔しタルソのサウロが威嚇を吐きつゝ、ダマスコなるイエスの弟子等を滅ぼし盡さん

ものと、其旅路に上りし時には、此道を通りたると疑ひなし。(徒九〇一―三)。門の内に、多くの塔に圍まれて、如何にも鬱陶しき牢獄狀の一巨室あり、其處より陰氣なる梯子を攀ぢ上れば、即ち上部の室に至るべし、現今此の門は土耳古の兵卒等之を護衛せり。

(46)諸王の墓

此の墓所はダマスコ門の北、凡そ半哩ばかりの所にあり。左方に見ゆる岩の傍なる道を下り行けば岩を截り開ける門あり、之を入れば、方五十呎ばかりなる打ち開けし所に出づ。之が一側面よりして即ち其の墓所に入るべし。之を探見するには蠟燭を點じてするなり。此の墓所は岩を截り開きたる數個の室より成り、其室の前後左右にまた數箇の小室を結び付けたり。石垣は全く人工を加へず、少しも鑿痕を止めず。亦何等の記銘も是れなきが故に、何の舊跡たるかを推知すべき術もなし。今日一般の人の信ずる處によれば、此の洞穴の中には諸王の遺骨の一だも葬られしにはあらず、只是れ紀元四十八年頃、猶太敎に

改宗したる女王ヘレナの遺骸を葬る爲めにとて造られしものなりといふ。ヨセフアスのいふ所によれば、該女王は即ち此處に葬られたりしなり、此の岩造りの墓の外部に見ゆる建築上の裝飾は、羅馬時代のものなるを示す。左すれば、ユダの諸王の埋葬地ならざるとは實際確實なり。

(47)アケルダマ、即ち血の地所

ヒンノムの谷の南面、嶮岨なる所の東端に、右の如き名を帶びたる一舊跡あり。是れイエスを賣せし者が受けたる銀三十にて買ひたる土地にして、亦ユダが自ら縊れ死したる場所ありと想像せらるゝが故に、即ち此名あり。「其地所を方言にてアケルダマと呼ぶこれを譯ば血の地所なり」(徒一〇十九)。今日は「陶工の田」といふ名一層能く通用す。中世の頃には、此地所の土は死人の体を僅々廿四時間内に全く泥土と化する奇効ありと信せられたり。女帝ヘレナは此土を二百七十艘の船に積みて羅馬に送りたり。此地所は別に何等の境界を設けず、見渡す限り、所々に墳墓ありて、其の或るものは十字軍の兵士の埋葬所たる

を表し、また或るものは、それより後の世の巡拜者の埋葬所たるを表す。此の中に「使徒の洞穴」と稱せらるゝ一の墓あり、是れ「弟子皆イエスを離て奔去りし」(可十四〇五十)時に、使徒等此に來りて其身を匿せりといふ昔譚に由來したる名なり。

(48) エリコに往く途上の休息

此の圖は一隊の旅行者日中に休息をなせるの狀なり。重荷の負擔者として忠實温良なる駱駝は現今次第に減少し、馬と驢馬を以て之れに代用することなれり。されば旅人の天幕、寢具、食物を運ぶには、今日最も多く馬と驢馬とを用ふ。パレスチナを通過する此等の旅人は、通常朝早く出發し、徐々に其進行を續けて正午に至る。而して正午に休息をなし、食事をしたゝむ。斯くて午睡をなすこと一時間乃至二時間に及ぶこと往々なり。午後の旅行は最も倦み易し、是れ熱氣と塵埃と駱駝の疲勞せる体と、皆何れも不愉快の思ひを助くるが故なり。されば夕暮の蔭至るを見れば、何れも喜んで之を迎ふるなり。此地に於ける天

幕の生活は、粗暴强健の人には様々ある面白味あり、されど神經過敏の人には、往々不快を與ふることあり、是れ時としては不意に暴風雨起りて眠れる旅人の頭上より天幕を吹き拂ふことあるによる。凡そ此等のすべての事實は、かの「枕する所なかりし」（路九〇五十八）イエスが浪々の生涯を酌み知るの一助たるべきのみ。

(49) スコパス山よりエルサレムを望む

聖市エルサレムは地中海の水平よりも高さ二千六百十呎、ヨルダンの水平よりも高さ三千九百二十二呎なり。其の位置、五山の頂きにありて、北方を除けば、三方皆深き谷を以て圍み、寔に是れ世界中屈指の要害を占めたる都會なり。されば、昔の戰術を以てする時は、之を攻め落すこと實に困難なりしが、近時の大砲を以てすれば、一擧にして能く其城壁を粉碎すべし。そは兎に角、北方には別に敵の侵入を防ぐべき天然の固めなく、其地は爪先上りに昇りゆきて遂に此圖に見ゆるスコパス山の頂に達す、此山は橄欖山脈の西方の突起部にして、エルサレムを距ること凡そ一哩なり。我等此の山上に立ち、聖經歴史の中

心たるエルサレムの周圍の五山を望めば、坐ろに詩百廿五篇の二節に、所謂る「エルサレムを山の圍める如くヱホバも今よりとこしへにその民をかこみ給はん」てふ一語を思ひ出さゞると能はず。石垣の西北隅スコパスに面せる方に、有名なるセフヒナスの塔建てられてあり。其高さ七十キユビト（凡そ百〇五呎）にしてアラビヤ及び海面の日出の景を望むべし。

(50) ベタニヤとエリコに至る途上

人若し是等千有餘年間の人の踵に踏まれし古き街道を通過すれば、心は飄然として自ら此街道を有名ならしめたる人物と事件とに、さまよふなるべし。あゝ聖書中の夥多の大人物は即ち此の街道を踏みたるならざるべからず、今此の寫眞圖は、即ちイエスが好んで徃遊し給ひける昔の名邑、今の荒村たるベタニヤを示すものにて、此に二三の人物あるを見るべし。されど此街道の荒廢の甚だしき、數哩の旅行中、一個の人影をすら見ざると徃々あり。昔し瞽者バルテマイ路傍に坐して食を乞ひ、イエスのベタニヤに赴かせ給ふ路すがら、其所を過らせ給ふと聞きて大に呼はり、「ダビデの裔イエスよ我を恤み給へ」（可十

○四十七）といひたるは、思ふに此の街道の何處かにてありしならん。尙ほ聖書のいふ所によれば、此の瞽者、見ゆることを得て後、直ちに「イエスに從ひて路を行けり」とあり、傳說に由れば、イエスの一言によりて枯れたる、實らざる無花菓樹のありし場所も、また此の街道の附近なるべしといふ。（太廿一〇十九）

(51) ベタニヤ

ベタニヤは橄欖山の傍にある一小村落にして、エルサレムを距ること、二哩未滿なり。此の村、エルサレムよりエリコに到るの途上にあり。人家は皆石造にして、其の材料は古の建物の殘片なり。其の周圍は橄欖樹、柘榴、無花果、巴旦杏簇生し、エルサレム近傍なる不毛の赭山に對し、見るものをして愉快の感あらしむ。ベタニヤに遊ぶの興味は、凡て過去に關係するもののみ。昔しイエス此地に玉趾を枉げ、屢奇跡を行ひ給ひしより、名聲傳へて以て今日に至る。旅客若し此地に遊ばゞラザロの城と稱せらるゝ一の古き塔を見るべし。其の附近にラザロの墓と想像せらるゝものあり、此に達するには、二十六級の石階を

踏み、入口よりも低さと凡そ二十呎ばかりなる一室にとは下り行くなり、亦此の邑にマリヤとマルタの家と稱せらるゝものもあり。

(52) エルサレムよりエリコに至る道、附エリコの平原

ペタニヤよりエリコまでは、其道の粗悪荒蕪なるは、パレスチナ全國中にて比類なき所とす、時ありてか危險いふばかりなく、此の野蠻亂暴の實況を見るもの、心に善きサマリヤ人の譬を思ひ出さゞるとなし。聖書に所謂る「エルサレムよりエリコに下る」(路十〇三十)とあるもの、眞に是れ實際なり。其勾配の急なる、エルサレムはエリコの谷よりも高さと四千呎なりといふ一事を記臆せば即ち明かなり。此邊一体荒漠不毛の山と谷とは、昔しイエスが四十日の間漂泊し「野」にして、中にも其最も高き山の一は、悪魔その頂上よりして「世界の諸國とその榮華」(太四〇八)とをイエスに示せし所なりと稱せらる。聖書の讀

者はヨシユアと其の軍勢と、喇叭を吹きし時に此市の石垣の毀れしこ
とを記臆せらるゝことあらん。此市の荒廢は人をして約書亞六章二十六に所謂る「凡て起てこのエリコの邑を建る者はエホバの前に詛はるべし」てふ語を思ひ起さしむ。近代のエリコは、汚穢なる亞剌比亞人の村落にて何等の興味もあることなし。

(53)エリコの泉

こはパレスチナ中にても流最も清く、水最も多き泉の一なり。源を一の嶮しき丘の麓に發し、水勢急激にして其幅は六呎乃至八呎あり、川底は小石にして、此上を走る水は微妙の音樂を發し、潺々たる響き、東方諸國の旅行者の稀に聞くを得る所なり。其兩岸には八重葎いやが上に生ひ茂り、旅客をして坐ろに故郷の溪流を思ひ起さしむ。此泉の名は列王紀略下に記さるゝ儼かなる話に由來す、即ち其の二章十九―二十二に曰く、「邑の人々エリシャにいひけるは視よ吾主の見たまふ如く、此邑の建る處はなし、されど水あしくしてこの地流産をおこす、彼言けるは新しき皿に鹽を盛て我に持ち來れよと、乃ちもちきたりけ

れば、彼いでゝ水の源にいたり、鹽を其處になげいれていひけるは、「エホバかくいひたまふ、われ此水を愈す、是處よりして重て死あるひは流産おこらじと、其水すなはちエリシャのいひし如くに愈て今日にいたる」と。

(53) エリコの泉

[illegible]

(54) ヨルダン川

此川は世界中、最も高名のものといふも、敢て過言にはあらじ。其長さは凡そ二百哩其幅は平均百呎乃至二百呎あり。水勢極めて急にして、屢〻岩に激し、屢〻瀧をなす。川底は粘土にして、此上を急奔するにより、其水は全く濁れり。ヘルモン山附近の積雪融くる時には、年々水量の増加あり、世に之を稱して「ヨルダンの漲溢」といふ。其兩岸は茂りたる草と葦を以て掩はれ、其間に金盞花、白頭翁、桃色の夾竹桃など咲き亂れて、ゑもいはれぬ風致あり。されどヨルダンの高名なるは、其風景によることにはあらず、風景よりいへばダマスコの諸川却て之よりも美あり。而して其高名なるは、實に歴史上多くの關係の

るによるとありとす。此處に癩者ナーマンはアバナとパルパルの諸川の現はさゞりし徳あるを見たり。(王下五章)。收穫の頃には兩岸に溢るゝ此川は、其流一時止まりてイスラエル人をむかふの岸に濟らしめたるとあり、(書三〇十六)。其後ち兩回、エリヤとエリシャの爲めに水の二に分れたるとあり(王下二〇八、十四)。此處にイエス、ヨハネよりバプテスマを受け、それと同時に天開けて其聖典の承認せられしとあり。(太三〇十三以下)。

(55) ソロモンの池

人若し此の清き池の周圍なる工事の尋常ならざるを見るときは、ソロモン時代のものと思ふと難しとすべし。されど最初ダビデの子ソロモン現今の形狀に造り上げしとは、實際なるべく、但し其後時々に修繕を加へしとは是れあるべし。傳道書二章六にソロモン曰く、「我また水の塘池をつくりて樹木の生茂れる林に其より水を灌がしめたり」と。此等の池の水源たる泉は、丘の側、人目の及ばざる所にありて、「閉たるソロモンの泉」の名あり。其構造は第一池の餘水、第二池に注ぎ入り第二池の餘水、第三池に至るやうにせり。第三池は即ち最下の池にして形狀最も大きく、長さ五百八十二呎、幅二百〇七呎、深さ五十呎あ

り。此池を造りし最初の目論見はエルサレムに水を供給することにありき。現今は此水たゞベツレヘムに至るのみ。但し昔の水道の痕跡を見れば、其のエルサレムに通ぜしを知るべし、此の距離凡そ十三哩あり。

(56)マクペラの洞穴の上に建てられし回教堂

ヘブロンの奇勝は基督教徒と猶太教徒と、回教徒とを問はず、皆先づマクペラの洞に其指を屈すべし。されど現今は此處また洞穴あるにあらず、其形狀重くろしくして何の雅致もなき回教堂ありて立てり。旅客は此中に入るを許されず、遠方よりして眺望するを得るのみ、回教徒の守衛嚴重を極めたり。一千八百六十二年までは制禁最も固くして一人の猶太教徒、基督教徒を入れたることなかりしに、同年英國皇太子ウエールス親王初めて此の由緒ある舊跡に入ることを許されたり。此の皇族の一行、アブラハムの墓を堅めたる銀門に足を入るゝや、祭司叫びて曰く「ア、神の友よ(アブラハムをいふ)此の侵入者の罪を恕せ」

と。アブラハム、イサク、ヤコブの遺骸は、其妻サラ、レベカ、レアのと共に皆此にあり。敎堂の石垣には所々罅隙と裂口あり、是れ皆信仰の父（即ちアブラハム）に捧ぐる祈禱文を貯藏し置くに用ゐらるゝものあり。

(57) ベエルシバの井

ベエルシバはパレステナの南極端にありて、此の國にては最も古き場處の一なりとす。南方よりしてパレステナに入る旅客が第一に邂逅するものは、即ち此のベエルシバの井にして其數都合七箇あり、中にも二は大きく、五は小さし。今此圖に見ゆるは、其の最も大なるものにして、直徑凡そ十二呎、其水面までは凡そ四十呎、而して石垣は地下二十五呎以上にまで達す。此井の周圍にある石は、圖を見ても知らるゝ如く、アブラハムの時代以後、幾百年の久しき間、釣瓶繩に磨り耗されて深き溝をなせり。ベエルシバとは「盟約の井」の義にして、アブラハムとアビメレクの間に訂結せられし盟約に由來す。創世記廿一

章三十一に曰く「彼等二人彼處に誓ひしによりて其處をベエルシバ（盟約の井）と名けたり」と。イサクは此處に成人したるなり。又アブラハムがイサクを献ぐべき命を受けしは、即ち此處に相違なかるべし。（創二十章）。それより遥か後日に預言者エリヤは女王イゼベルの怒を避けて此處に來れり（王上十九〇三）。

(58) シナイ山脈

此の山脈は突兀たる無數の岩山より成り、參差として攢まり、高低、互に同じからず、草なく、木なく、一点の緑色だもなき物凄く、恐ろしき光景を呈す。是等の峰の一より四方を望まば滿目只是れ「荒涼の海」にして、世界の表面に二とはあるべからざる殺風景なり。峰と峯との間なる谷は、嶮しくして、且つ狭く、絶壁削り成せるが如くにして、高さ何れも數百丈、峽と峽と相重疊し、之を安全に跋渉し得るものとては、此の千古の幽處に住み慣れたる野蠻の亞剌比亞人あるのみ。此の山脈は漸次北方紅海に向ひて傾斜し、此に大なる原野をなせり。イスラエルの子孫が其家畜の群と共に四十年間漂泊たるは即ち此處

なり。(出十〇九)。當時若し今日の如くに不毛荒漠なりしならば、彼等が生命を支へたるもの、一に皆奇蹟に由りたりとせざるべからず。されど此の荒野も昔しは水あり、植物ありしと創世記四十七章一節によりてしか考ふるものなり。現今は駱駝の外、何等の獸類も此の荒野を通過する能はざるなり。

(59) シナイ山

律法の授けられし山は、摩西の五書の中、申命記にてはホレブ山と稱せられ、他の四書に於てはシナイ山と稱せられたり。現今はシナイの連山の間に孤立せる長楕圓の中央山脈の中、相對峙せる二の峯に此二の名を付するとなれり。南より北までの長さは凡そ二哩にして、其幅は之が三分の一ほどなり。高さは海面を挺んずると凡そ七千呎なり。山麓は深く且つ狹き谷全く之を繞り、全能者が特別に此の神聖なる山を區畫したるかの感あらしむ。定處を得ざりしイスラエルの子孫は、ホレブに止まると殆んど一年、此間に於て其の神政治は全く成立したり。神の律法は此山よりして最と儼かに公布せられ、神の指にて書さ

れしものとして與へられぬ。我等此の神聖なる山頂を仰ぐ時は、聖書に所謂る「その煙、竈の煙のごとく立のぼり山すべて震へり」(出十九〇十八)てふ記事の自ら聲あるを覺ふ。

(60) クズ子の堂

是れはペトラ附近なる多くの絶景なる谷の中の一にあり、堅き砂岩石を截り開きし美麗なる祉殿あり。此谷は歴史的なるセイル山近傍に於て、興味最も多き觀覽處にして、英國教會の敎師スタンレーが、かばかり美麗なる谷を見しことなしと言ひつる處と正しく相對し、稱して「モーセの谷」といふ。斷崖往々にして二百五十呎の高さに達し、兩際相窄まる部分に於ては其幅十二呎を超えざる所あり。淸流此間を通じ、夾竹桃之に茂生し、鬱蒼たる葡萄、道を掩ふて僅かに日光を漏らし、寔に世界有數の樂しき道路なり。此の延長恰かも一哩、其行き盡くる所にクズ子の堂立てり、壯觀能く旅客の眼を驚かしむるに足る。此の

珍らしき奮跡の性質と、其人に與ふる感動とは、誠に言ひ盡すべからずとは、ニウヨルク神學校教授ロビンソン氏の述懐なり。

(61) 紅海

此の大海のうち聖書の讀者に最も興味多き部分は歴史上有名なるシナイ半嶋其間に斗出し海を分割して之を二の灣となす。其の西の方なるは所謂るスエズ灣にして、長さ凡そ百三十哩、幅平均二十哩なり。又東の方なるはアカバの入江にして前者に比しては遙かに小なり、此の海岸の險悪にして岩礁多きは、此圖によりて其一斑を知るべし。此海は幾百年の間、東方諸國のうち、海上貿易上、無二の要地を占め、埃及人、ヒニシヤ人は、其の航海者中の重もなるものなりき、されど此海をして最も有名ならしめたるものは、イスラエル人が埃及を出づるに當りて行はれし、最後の奇跡なり。其奇跡とは、モーセと其民と

安全に之を濟り、バロと其軍勢の滅びしと是れなり（出十四〇）。近代の探撿に由るに、モーセ此處に於て淺瀬を發見し、而して非常の潮流バロを推し流したるなりとの偏理論は其所由なきと明白せり。さすれば此の奇蹟は、聖經歷史の中、奇の最も奇なるものとす。之を濟りし渡頭の何處なりしかは、未だ確かには知られず。

(62)紅海の傍にある峽

バロと其大軍、紅海を涉らんとして果さず、イスラエルの子孫獨り彼岸に達するや、其第一に目に觸れし景色は、即ち此圖に見ゆるが如き景色なりしなり。サナイ大半嶋の諸山脈は、諸所に於て恰かも海の汀にまで達し、屹立して大なる石垣をなせり。其間々には狹き谷と路とを交へ、自然の門をなして、飾らざる風景、凡て此の地の趣を添ふ。チーン、スタンレー此の地方の飾らざる景色が神と其撰民との應對交通に相當なりしと說て曰く「彼等は緣なすナイルの谷間と全く相表裏せる荒涼の地に親しむべきとなりぬ。彼等は手にて造られざりし殿堂と尖字塔との聖所——言を換て言へば、彼等及び彼等の祖先が埃

及に於て見しとは全く相異なりて一層嚴かなる聖所――の中にとは取り入れられぬ」と。人若此の磽确にして荒漠たる地方の性質を細かに吟味せば、イスラエル人等が其荒野に漂泊ひし間、不思議の御手當てを蒙りしとを全く信ずるに至らずんばあらず。

(63)ベツレヘムの全景

基督教徒たる旅客に直接の感動を與へ其聖なる感情を動かさしむる舊跡は、イエスの死地たるエルサレムを除けば、眞の命のパンたる(約六〇三十節以下)イエスの誕生地に如くはなし。さて其の誕生地たるベツレヘムの初めて歴史に上りしは、ラケルの死と葬式より初まる(創世記三十五〇十八―二十)、後ち六百年を經て、此地ボアズとルツの奇談の舞臺とはなれり。(得四〇十三)、またダビデは此地に誕生し、十七歲の時、膏灌がれてイスラエルの王となりしかば、其紀念のため「ダビデの邑」の稱を得たり。其後久しき間一事の世に知られたるものあらざりしが、終に「神肉体となりて顯はれし」(提前三〇十六)邑とし

て、前代未聞の榮譽を得たり。現今この邑は凡そ五百の民家と、「降誕の會堂」と、附屬の修道院とより成る。民家の清潔なる狀態と、民情總じて愉快の氣に滿ちたることは、以て旅客の注意を惹くに足れり。ベツレヘムは其感情よりいへば全然キリスト教徒なり。イエスは今尚は其誕生地に主權を握らせ給ふなり。

(64)ベツレヘム(敎會を望む)

救主の誕生地として永遠に紀念すべきベツレヘムの此圖は、此地の風景の一種特異なることを窺はしむるに、遺憾なきものとす。邑は山脈の本部より突出したる狹き山嶺上に位す。山巓より周圍の谷に至る間は、其傾斜少しも高低なく、一面の麗しき平場にして、老練なる園丁の手工かとも思はるゝはかりなり。此等の平場には、鬱蒼たる葡萄と橄欖樹生ひ茂り、嶺の東端、少しく邑を離れたる所には、嚴乘なる多くの建物、群がり立てり。是れイエス誕生の舊跡なりといふ、此の建物は即ち「降誕の會堂」と三箇の修道院なり。中に就て敎會堂は第四世紀の初め、女帝ヘレナの建つる所にして、世界に於ける基督敎の建築

物中、最も古き紀念物の一に數へらる。されど現今は原始の建築の一小部分を遺すのみ。其中に在るコリント風の圓柱の幾分は、元エルサレムの神殿の一部を搆成したりしものと稱せらる。

(65)降誕の會堂

ベツレヘムの遊覽者に取りて床しきものゝ第一は降誕の會堂是れあり。此の會堂は紀元第四世紀の初め、女帝ヘレナの建立する所にして、全世界の基督敎建築物の中にありて、最も古き紀念物たり。此堂は中央の中堂と數列のコリント風の圓柱もて區劃したる數個の飛椽とより成る。傳說に由るに、此の圓柱は皆エルサレムの神殿の廊より取り來りしものなりといふ。又壁上の嵌工は、此の會堂建築の當初より是れあるものありとぞ。此の中、舊形を完ふせるものもなきにはあらざれど、多くは、昔時の美麗を左てぞと忍ばしむるに過ぎず。元この四壁を燦爛たらしめたる黃金や、大理石や、其他多くの嵌工は、時を經る

まゝに、追々取り去られたればなり。圓柱は皆一本石もて作りたるものにて、此の圖は即ち其の幾分と嵌工の遺物とを明かに窺はしむるに足る。

(66)ベツレヘムにある降誕の禮拜堂

降誕の禮拜堂は、岩の中にある一の洞穴にして、前圖の會堂は實に此の岩の上に立てるなり。されば此の禮拜堂は、會堂の床下二十呎の處にありて、二個の螺旋條の階段を架し、以て其の昇降に供す。さて此の階段は何れを降るも可なり。之を降れば即ち地窟に達す、其の形狀は不規則にして、其岩を截り開きしものなると一目瞭然たり。之を圍むに以太利大理石を以てし、燈器、刺繡、聖徒の肖像其の他多くの飾物もて之れを飾れり。此の東端に一の閑室あり、其處には大理石の平石を敷き詰め、而して其中央に銀製の星あり、是れキリスト降誕の場處を標するものなり。此の星の周圍に羅甸語の銘ありて「此處にイエ

スキリスト、處女マリヤより生れたり」と記せり。此の直上に十六の燈盞懸り、其の光は曾て消えたることなし。さて又此の閑室は、恰かも、「槽の禮拜堂」と相對し、而して木造の槽の發見せられしといふ舊跡との中にあり。當今は此の槽ローマの聖マリヤ、マギオレ會堂の什物たり。又此内にある博士の祭壇は、昔し東方の博士が其の禮物を献げし處所に立てるなりと稱せらる。（太二〇十一）

(67) 西南より見たるベツレヘム

ベツレヘムはエルサレムに次ぐの靈場にして、此圖は即ち其の市街と人家の一斑を示せるものなり。其の市街は甚だ狹くして坂を爲し、且つ往々にして危險なるとは、其の岩石の滑かなると是れなり。戸數は六百内外にして大抵甚だ堅牢なり。また其の樣子の清潔瀟洒なる、東洋諸國に於ては村落と都會とを問はず、誠に稀に見る處なり。住民は今日尚はダビデの特質たりし尚武の氣質と、血氣盛んなる肉色とを露はし、外客に對しては甚だ鄭重にして、物を乞ふよりも寧ろ物を賣り付くるを好めるが如し。此の住民の大半は、十字架上の聖像と、神殿の摸型とを製造するを其職業となす。此等は橄欖樹若しくは死海よ

り取り來れる木もて彫刻したるものにして、何くれとなくイエスの誕生地の紀念物を得んと望める巡拜者の間には、自ら賣行き好し。聖書歴史の中、大事件といふほどの大事件は殆んど皆此のベツレヘムの周圍なる洞穴と地窖より顯はれしなりとは、此地の住民の、他に優りて誇りかに主張する所なり。

(68) ラケルの墓

ヤコブとレアの遺骸は共にマクペラの洞穴にあり。而してヤコブが何故その愛妻ラケルを路傍の通常の野中に葬りしかは其理由分明ならず聖書にいふ「ラケル死てエフラタの途に葬らる、是即ちベツレヘムなり」と(創三十五〇十九)。而して其の遺骸は、後年に至るも堀出されてマクペラなる一家の墓地に葬られざりしとは稍奇といふべし。ラケルの墓は石造にして凡そ二十平方呎あり、屋根は圓形、即ち圓頂格にして、虚の場所、即ち室は、路傍に向へり。墓の入口は戸を鎖したるが其大なる鍵穴より内部を窺ふに、素朴なる石垣と、石垣の間壁とあり其高さは室の高さの半ばにして、其の一端に戸を設けたり。之を要す

るに、此處は、殺風景の荒地にして蕭條寂寞の中に、美くしきイスラエルの婦人の遺骸は息めるあり。

(69) マルサバの修道院

此の修道院の建築は精巧異常にして、如何ほどの健筆を以てするも、精密には記し盡し難し。紀元四百三十九年、聖サバの剏立する所にして、其の當時にありては恐らく堅き岩を穿ちし只一室ありたるのみならん。現今は是等の岩室多く相連なれり、されどこは初めより一定の方式若しくは設計ありてにはあらず、都合次第追々に作り設けたるものなり。此の建物は總て廻らすに、高き石垣を以てし、滿目荒凉として、自ら浮世を離れんとする人に取りては、理想的の好道場なり。尙は此の高き石垣に加へて、人の眼に觸るゝは二の塔あり。是れは修道院の本堂の少しく上方なる山側に立てり。思ふにては、修道僧等の痛

く恐怖せしビトゥイン族の不意の攻撃を防ぐための物見樓として建てられしなるべし。此の奇異なる螺形堂の内には、種々の奇物あるが中に、殉教したる道僧の髑髏六万四千個を有すといふ地窖あり。此の修道院の内へは、古來未だ婦人の立ち入りたるものあらず、是れ婦人にして其の内に一歩を入るれば、石垣は忽ちにして墜落すべしとの傳説あるに由る。

(70)牧羊者の野

ペツレヘム近傍に原野多し、主御降誕の當夜牧羊者等が其群を守り居たりといふは(路二〇八)果して此中の何れにや、我等確かには知ると能はず。されど今此圖を見渡して、彼の野は即ち此の地續きの「近傍」ならんとは推し得らるゝなり。但し傳説は今此の圖に見ゆる所を彼の野と定め、石垣を以て之を廻らし、その内に幾株かの美はしき橄欖樹生ひ茂れり。此の中最も昔し床しきものとしいはゞ、蓋し牧羊者の洞穴なり。洞穴とはいへ、今は地下の小會堂にて、數葉の名畫を貯へたり。此の所有主は希臘人にて、其の主張する所によれば、此處ぞ天使出現して、牧羊者に向ひ「懼るゝこと勿れわれ萬民に關りたる大なる

喜の音を爾曹に告べし」といひし處、且つ又主の榮光かれらを環り照せし舊跡あり。我等此の靈場に參拜するに、星の形したる藍色の愛らしき小さき花、足下に咲けるを見る。この花を案内僧は、「ベツレヘムの星」といひ、摘み取りて此地を遊歷せし紀念物とする人も往々あり

(71) 死海

死海は世界中、最も多く學術上の穿鑿を受けし奇異の海にして、長さ四十六哩、幅十一哩、深さ平均一千呎なり。エルザレムの地平よりも低きこと四千呎に近く、亦地中海よりも低きこと、一万三千呎强なり。ヨルダンの谷間に於て、凡ての荒凉たるものヿ內、最も物凄き不生產地は即ち此海に如くはなし。矮小なる灌木は岸に生ひざるにあらざれど其數至りて稀に、水中には亦一の生物だに存するとなきなり。歷史家ヨセフアスは「此の海岸一体に不毛にして其水苦く、且つ如何なる重き物体を之に投げ入るヿも沈まざるほどに濃厚なり」と記したれば、其時以來今に至りて變更なきものと見へたり。或る藥劑士は、此の水

の味を瀉利塩と括矢亜の丁幾劑との化合物に比じたるとあり。さはいへ、此の物凄さ不生産的の海も、聖書の研究者に取りては、いとく床し。是れ蓋しソドムとゴモラの兩邑のありし舊跡にして、此地に關し、「エホバ天より火と硫礦を雨せり」(創十九〇廿四)と稱せらるればなり。此海は見渡す限り一の硫通口なく、之が爲め、時々大蒸發を起して濛々たる陰霧之を鎖し、見る者をして地獄の樣も斯くやと思はしむるとあり。

(72) ベテル

此の有名なる地は、エルサレムの北凡そ十二哩、シケムに至るの途上にあり、現今は此跡にスリア人の小村落立てり、此邊一体の土地は岩石質なると、今の圖を見ても、大かた明かなり。さればヤコブが彼の貴き夢を見たる夜に、其頭を安し石の枕は、何の困難もなくて發見せられたるなるべし。(創二十八〇十一―二十二)。又アブラハムとロトが互に相談るゝに先ち、立ちて四方を觀測せしといふは、此の近傍の小山に於てなり。(創十三〇八以下)。此にヤラベアムは金の犢を造り(王上十二〇二十六―三十)此に二頭の牝熊はエリシヤを嘲りし多くの兒子輩を擘き殺し(王下二〇二十三、二十四)たり。此圖を見る時は、其道

の嶮峻磽确として、梯子を昇るが如くに昇り難かりしといふもの、實際のどたるを想像するを得るなり。此に偶像禮拜を行ひたる結果軈て荒廢の土地となるべしとは、アモス、ホゼア兩預言者の預言する所にして、ベテル即ち「神の家」は、幾許もなくしてベテアベン即ち「無の家」となり了れり（歷五〇五と何十〇五比見せよ）。

(73) サマリアの遠景

昔のサマリアはイスラエルの王國の首府たりしは聖書を讀む者の熟知する所にして、附近の溪谷よりも高さ五百呎なる一の丸山の上に好地位を占めたりしなり。昔しアハブの父オムリ、「銀二タラントを以てセメルよりサマリア山を買ひ其上に邑を建て其建たる邑の名を其山の故主なりしセメルの名に從ひてサマリアと稱り」（王上十六〇二十四）といふは即ち此山なり。ロビンソン曰く、「パレスチナ國中にて、是ほど堅固なる、是ほど肥沃なる、是ほど美麗なる地を發見するは難かるべし、此の諸点に就ては、サマリアは遥かにエルサレムに優れり」と、アハブがバアル神のために殿を建てたるは蓋し此處に於てなり。

即ち聖書に記していふ「彼其サマリアに建たるバアルの家の中にバアルの爲に壇を築けり」と（王上十六〇三十二）。此の殿はエヒウのため、破毀せられたり（王下十〇二十六—二十八）。癩者ナアマンは、此處にてイスラエルの預言者に邂逅せり（王下五〇九）。げにや此地の貴なるは、エリシヤの此處に居住したると、亦其の事業とに由るものを多しとす。

(74)サマリアにあるヘロデの連柱

昔のサマリアは高き山の背に長く立て續きたりしにて、廣大なる、麗はしき谷之を廻れり。其の廢墟は大方分明し且つ如何にも床しき心地せらる。何れの方面を見るも、其の嘗て樂しく且つ繁昌なる市たりし證據を存し、之と同時に米迦六章に所謂る「是故に我サマリアを野の石堆となし葡萄を植る處と爲し又その石を谷に投おとしその基を露さん」とあるを覺えず思ひ起さしむ。今此の圖は、ヘロデの時代に建築せられたる連柱の若干を示す。現今存立するものは凡そ百本内外にして、其保存法は能く行き届けり。其高さは凡そ十六呎、直徑は凡そ二呎あり。今は耕地と、石垣と無花果および橄欖の畑の中に立ちて、坐

ろに今昔の感に堪ざらしむ。此の市はヘロデ大王巧みを盡して再建したりしが、今日は荒廢もはや地に委して、ヘロデ大王の名が歴史の紙面に形ばかりの名を止むると、同じ不運の狀態にあり。

(75) サマリアのヤコブの井

最も綿密の撿定と探究とを盡せし人は、皆此井のヤコブの井あるとを異口同音に主張す。其の地位はケリジム山の麓の附近、ヤコブが其子ヨセフに與へし地面の一部分にあり。(約四〇五)。ヨセフの墓は此地を距ると遠からず。嘗て此井の上に會堂を建築せしとありしが、今は僅かに其の形跡を髣髴するを得るのみ。さて此の井の口に達せんとすれば、先づ數呎を下り、直徑凡そ九呎ほどの弓狀の地窖に至らざるべからず。此の井は其深さ恐らく、七十呎ほどあるべく、夥しき水を湛えたり。されど、許多の塵芥の落ち込みしとなるべければ、昔は今よりも嘸深かりしなるべし。此の井の高名とありたるは、イエス此の傍に座

し、サマリヤの婦人を敎へ、「爾もし神の賜と我に飲せよといふ者の誰なるを知ば爾われに求めん然ば活水を爾に與ふべし」との金言を吐き、婦人は之れに答へて「この井は我儕の先祖ヤコブの與し所なり、彼も其子も亦畜までも皆これを飲たり、爾は彼よりも勝れし者ならん乎」、(約四〇十、十二)といひつる事實に由來するとなり。

(76)サマリアの廢墟

現今のサマリア村は、殆んど見るに足るものなけれども、旅客の目の觸る〻處、廢墟累々として昔の殷富と繁昌とを語り聞かする談柄ならぬもなし。讀者よ記憶せられよ、これは預言者エリシャの言に應じ、一旦救はれれる後亦アッスリア人に滅されしものなるぞかし(王下六七。同十七〇三以下)。後ちヘロデ大王之を再建したり。此地古跡の尋ぬべきもの多きが中に、聖約翰會堂は、最も多く人の注意を惹くに足れり。此の堂は直立百呎を下らざる斷崖の上に立てたるなれば、誠に莊大なる紀念物たりしに相違なし。所謂るバプテスマのヨハネの墓は、此の會堂の床下にありて十五段の石階を經て之に達すべし。堅き

岩を堀鑿して作り、其廣さ凡そ二十平方呎あり。ヨセファスのいふ所によるに、ヨハネは死海の東なるマケラスの城中にて斬首に處せられたり、されど此處は即ち其の遺骸を葬りし塲處ならんとは殆んど一般に信せらるゝ所なり。

(77) シケムのナブルス

ナブルスは愉快なる地位を占む。即ちエバル山とグリジム山の間なる谷にあり。抑も此の谷は非常に膏腴にして清泉と流水と所々を潤ほし、野菜と草蔬と思ふ儘に成長し、果樹の園檄欖の森甚だ多し。ナブルスはパレスチナ國中、最も舊き都會の一に居る、想像によれば、是れ即ちシケムの市の建ちたりし舊跡にして。其の歴史に溯れば、四千年の上に出づ。シケムはベスパシアン皇帝の世に再建せられ、ネアポリスと命名せられたり、ネアポリスは新京の義、而して此の名は一變して亞剌比亞のナブルスとなり、現今即ち此名を以て呼ばるゝに至れり。其の狭き町幅と、其石造の人家と、其數多き商店とは、人をしてエル

サレムの旅行を思ひ起さしむ。されど家は皆町の上に突き出でて、隧道の形狀をなせるが故に、陰氣なるとエルサレムの町よりも甚だし。

(78) エバル山

エバル山（呪詛の山）はナブルスの谷の北邊にあり。之に昇るには其道困難ならず、其絕頂に立ちて眼を放てば、左カルメルより、右ギルボアに至るまでガリラヤの諸山、一眸の中にあり。此に遊ぶものは、約書亞記八〇三十三、三十四の兩節に、エバルとエリジムに關して記したる光景いと面白く思ひ起さるべし。谷は其東端に於て幅六十竿（一竿は十六呎半）を超ゑず、申命記二十七、二十八兩章に記載せられし如く、各支派の民相集合し、レビ人の讀み上ぐる祝福と呪詛を聞きしは、即ち此所なり。其の傾斜は宜しきを得て、自然に能く音響を傳達し、旅客の此の野中に立つもの、能く其友の兩山より呼ふ聲を聽き

取るを得べし。

(79) ゲリジム山

ゲリジム山は（祝福の山）水面を拔くと二千呎に近し。廣大なる廢墟この頂上を蔽ひたるが、或人は之を以て昔のサマリア人の大殿堂の跡なりといひ、亦或人は皇帝ジヤスチニアンが此に築造せし大堡寨の一部分なりといふ。此に數箇の大なる石あり、昔譚によれば、これぞヨシユアが奇跡によりてヨルダンの流れを二分せし時の紀念として其處より運び來りし十二の石なりといふ。（書四〇）。此の附近に一の大なる岩あり、大神殿の祭壇なりしと稱せらる。サマリア人は之を敬して神聖犯すべからざるものとなし、跣足にあらざれば決して近づき至るとなし。彼の回敎徒は祈禱の時、必ずメッカに向ひ、猶太敎徒はエ

ルサレムに向ふと等しく、サマリア人は即ち其祈念の時に此の岩に向ふなり。サマリヤ人はいふ、これイサクの犧牲となりし處（創廿二〇）、ヤコブが幻象を見たる處（創廿八〇十八以下）、幕屋が初めて建られし處、（書十八〇一）契約の櫃の置かれし處なり（書八〇卅三）と。大凡そ此等の說は、一も證據の徵すべきものあることなし。此の西方は地中海にして、北方はヘルモン山、東方は即ちマグナの野にして、前にギレアデの諸山連亘す。

(80)摩西の五經、シケムにあり

シケムの會堂に存する一大奇物はサマリア譯のモーセ五經にして、此の譯本は、大討論の基となれり。一時はモーセ時代に書きたるものなりとの說もありしが、後ち又ピテハスの子にしてアロンの孫なるアビシユナ（エズラ七〇五）の謄寫したるなりとの說起れり。サマリア人の主張する所によれば、凡そ三千五百年の古物なり。されど一般の認むる處によれば、萬一キリストの紀元前なりとするも、左ほど多年前にはあらじとのことあり。若し此の譯本を見物せんとならば、前以て觀覽料を拂ふを要す、而して後、古びたる卷物を出し示さるべし。されど此卷物は正物にあらず。故に旅客にして、眞贋を判するたけの眼力

を具へたらんには、主僧も弟子僧も一笑して正物を出し來るあり。此の卷物は甚だしく磨損し、亦多くの接吻を受けて裂け破れたる所あり、而して羊皮紙の細片もて彼所此處を補綴せり。

(81) エスドレーロンの野

是れ各國民の大戰場として歷史上有名の谷なり。其長さ凡そ二十五哩、其幅凡そ十二哩あり、北境と東境には有名なるギルボア、ヘルモン、タボルの諸山峙ちて之を畫せり。聖書にはエズレルの谷とあり（約書亞十七〇十六）。シセラがデボラとバラクに打破られしは即ち此處に於てあり。（士師記四〇）。サウルがペリシテ人の手によりて最後の失敗に陷ゐりしは、此野の中、ギルボア山の麓に於てあり。アッスリヤ人と波斯人、猶太人と異邦人、十字軍の戰士とサラセン人、埃及人、土耳其人、亞剌比亞人、フランクス人等皆此處にて其の鮮血を濺げり。ナポレオンですら、此處にて一たび其大勝利を得たり。此谷の土壤は頗

る膏腴にして、能く多量の穀物を産するに足る。此間を貫通するは有名なるキション河にして、水清く、流れ急に、北西の方に向ひて走る。此の野の大部分には雜草いやが上に生ひ茂り、其生育非常なるものあり、以て知る、人の力を以てするも亦此の肥沃の土地より非常の生産を得べきことを。

(82) カルメル修道院

修道院は搆造廣大、建築單純にして二階より成り、之れに冠するに圓頂閣を以てせり。是れはアハブがエリヤを殺さんとせし時に、エリヤが隱れたる其洞の上に建てたるものなりといふ。之が管理に任ずる住僧は、能く外客を待遇す、されど實費を償ふだけの寄附は之を拒むことなし。カルメルは太古よりして聖經歷史に密接の關係あり、されど其の主として有名なるは、エリシヤとエリヤとに關係あることよりす。基督教の初代にありては、此の山上及び山邊の洞穴地窖に、無數の遁世者居住したりき。已にして修道院建築せられしが、ナポレオンのエークルを圍みし時、之を病院に利用せり。佛兵の退軍後此の建物は取り毀

たれ、その後幾年かを經てジャン、バッチスタてふ一僧の巡拜して此のカルメルに至りし時には僅かに祭壇と弓狀門の存するのみなりき。然るに此僧修道院を再建せんとの志願を起し、勸財すると十四年に及べり。當今の建物は此僧奔走の結果なりとす。

(83)東方より觀たるナザレ

ナザレはレバノンの南脈、將に沈みてエスドレロンの野とならんとする處の群巒の中にあり。一の愉快なる地にして十五の峰巒これを繞り、谷の西部に位す、其長さ一哩、其幅は一哩の四分の一なり。四方皆荒蕪なる中に挾まりて此地獨り豐富且つ肥沃なり。キリスト紀元前にありては、ナザレの名の歷史に現はれたるものなし。又降誕天告の頃にありては、可なりの大村にてありしなれど、舊約書の中にも、將た又猶太人の古書にも此村に就ては一点の記事もなし。主の時代にありては、ナザレ人てふ名、輕蔑の稱として通用し現今にても、パレスチナ附近なる市邑の小供等、旅人を見ては「ナザレーン」(ナザレ人の意)と

挨拶す。邑は畫の如き好風景を呈す。其家は、或は斷崖に懸れるが如きものあり、或は幽谷に巣を架したるが如きものあり。此地即ち是れヨセフとマリヤの住したる處降誕天告のありし處とす。(路一〇二十六、二十七)。イエスは其の埃及より歸來の後ち此を以て其の住所と定め、以て其の傳道に着手し給ふ時にまで及べり(太二〇二十三)。

(84) 西方より觀たるナザレ

ベツレヘムはイエスの誕生地として崇むべしとすれば、ナザレは其の三十年間の住所として一層崇むべきの地たり。此地エスドレロンの正北にありて、ダボル山を距ると凡そ七哩ガリラヤ海を距ると凡そ十五哩なり。又エルサレムの北七十哩にあり。此圖の示せる如く、愛らしき谷間に位置を占め、高さ凡そ八百呎ばかりなる峰巒其の四方を繞る。我等此の諸峰巒に登り、眼を此の好風景に凝すときは、イエスも亦幾たびか此等の山徑を攀ぢ登り、此等の永久不變なる峰巒を觀望し給ひつるならんと感ぜざるを得ず。歷史はキリストが此地に送らせ給ひし生況を文字に遺さゞれど、想像の力を以てする時は、尚ほ其少年

時代の御履歴を察し奉るに餘りあり。路加傳四章二十九に群民憤激して「イエスを邑の外に出し投下さんとて其邑の建たる山の崖にまで曳往り」と記したるは、即ち此圖に見ゆる嶮山の一に關してあり。

(85) 降誕天告の會堂

ナザレに於て昔し床しきものとし言はゞ、主としてイエス一家に關する古傳的の古跡なり。邑の南東部にラテン修道院あり、是れ傳説に所謂る天使がマリヤに問安せし時其立ち居たる洞穴ありといふものゝ上に立てるあり。(路一〇三十)。高き石垣を以て圍繞せられ、其境内に降誕天告會堂立てり。此圖に見ゆる高き祭壇は、天使ガブリエルに献呈したるものにして之に達するには、左右兩邊にある大理石の階段よりす。此の會堂を飾れる繪畫許多あるが中にヨセフとマリアの結婚式を畫けるものあり、又ヨセフに天使の現はれしを圖したるものあり。祭壇の下には一の地窖あり、階段を踏み下ると凡て十五にして天使の禮

拜堂に達し、それより更に二段を下れば降誕天告の禮拜堂に到るべし。降誕天告の禮拜堂には大理石の祭壇ありて、之にラテン語もて銘していふ「此處にて道肉體と成れり」(約一〇十四)と。マリアと天使の立ちたる所は二本の花崗石の柱を立てゝ之れを標せり。(路一〇二十六以下)。此柱の中、一本は曾て分れて二となれり、而して傳說によれば、其上部は不思議にも空に懸りしといふ。されど天井ある非常に丈夫らしき石細工と相繫がれるを見れば、此の傳說信ずるに足らず。

(86) ナザレなる處女の泉

天使ガブリエルが處女マリアに問安せし(路一〇廿六以下)古跡は希臘敎會の監定する所、羅甸敎會と異あり、因てナザレの東部に、別に降誕天告の會堂を建築せり。蓋しマリアが天使の訪問を受けし時には、泉の傍にありて水を汲みつゝありしとすると、是れ希臘敎會の所信なり。されば此の泉の上に、該敎會の會堂は立てり。其建築は低く且つ質素にして、巧みに畫きたる聖書の實景數幅と、降誕天告の名畫一幅とあり。水は會堂の下より出でゝ、石造の水路を通過し、直下ある出口に至る、水の石桶に注ぎ込む所の光景は、常に活潑にして且つ面白し。此地の少年は、此處を集會の好場所となし、日暮るれば水

を汲み取らんとて、其順番を待てる人々群をなす。我等は希臘敎會の所信を信用すると、せざるとに拘らず、此の泉は即ちこの附近に於ての最も著明なるものなれば、イエスも少年の時、屢々此の泉水を味ひ給ひしと感ぜざるを得ざるなり。

(87) タボル山

タボル山は美はしき丘にして、其頂上は稍扁平なり。卓然として獨り野の中に屹立し、一方ガリラヤの諸山と其脈相通じたれど是れ亦殆んど認め難きほどのものなり。高さは野より算すれば、凡そ百三十五呎にして、水平よりは二千呎なり。山の南側は殆んど禿して一木なく、之に反して北側は檞の森林之を覆へり。タボル山は變貌の山の舊跡(太十七〇一以下)なりと稱せらるゝこと此に數百年なりしが、近時の探撿にては、之を其舊跡と認め難きこと判然せり。希臘敎會は禮拜堂として二三の地窖を造り、此處にて、變貌の祭節を執行す。此の頂上より望めば、ガリラヤの海、ヘルモン山、エスドレロンの野、その他ナイン

シュナミ、テベリア、エンドルの諸邑一眸の中にあり。昔しバラクが其軍勢を集めしは即ち此處なり。(士四〇十四、十五)。ギデオンが兄弟の殺されしも亦此處なり(士八〇十八、十九)。それより遙か下りて此處はまたイスラエル人の偶像禮拜の場處となれり(何五〇一)。

(88)

九福の山

ガリラヤの海に程近き邊、その海岸よりして明かに見られ得る處に、此の麗しき山は屹立す。これ少くとも十字軍の時代よりして九福の山と稱せらるゝものなり。其形狀駱駝の鞍の二角に似たるより、又「ハツチンの角」の稱あり。高さは百呎を超えず、其の頂上には麗はしき平面の一地あり。傳說にいふイエスは此にて前代未聞の大說敎を演述し給ひたるなりと。山の四邊には種々の美麗なる花咲き亂れ、「野の百合花は如何して長かを思へ」(太六〇二十八)との語あるは偶然ならざるを知る。北方に當りて一の高山あり、此上に昔のサフエドの市あり、イエスは之れを仰ぎ觀給ひて、「山の上に建られたる城は隱るゝと

を得ず」(太五〇十四)と宣ひつるならん。また傳説のいふ處によれば此山の頂上は即ち彼の五千人を養ひし所なりと。(太十四〇十五ー二十一)。又二千百八十七年に、サラデンが十字軍を散々に打ち破りたるは即ち此處なり。

(89) ナイン

此村は、主その大奇蹟を行ひ給ひて不窮の名あらしめ給ひし地なり。現今は小さき人家の僅かばかり群を成せるに過ぎず。其の位置はヘルモン山の麓にして、タボルの南三哩カペナウンよりは凡そ二十哩の處にあり。ナザレの丘よりして分明に之を見るべし。丘の半腹に少し東に寄りてエンドルあり、此處はサウルがギルボアの決戦に先ちて尋ね行きし口寄の婦の住みし處なり。(母前廿八〇七以下、同三十一〇一以下)。ナインの村外に現用の埋葬所あり、岩を截り開きし極めて古き墳墓も此中に見ゆ。カペナウンよりナインに至る途筋は、此の墓邊を通ず、而してこれはイエスの時代に用ゐられし墓なるとは殆んど疑な

し。さすれば所謂る「獨の子」の遺骸の昇出さるゝを見て、イエス嫠の爲めに深く之を悲しみ、少者を甦らせて、之を其母に引渡せしといふは即ち此處に相違なし（路七〇）。

(90) ガリラヤのカナ

ガリラヤのカナとしいへば、我等常にイエスが婚筵に臨席して結婚の制度を祝福し給ひつる場所なるを感ずるなり。即ち約翰傳二章一ー十一に記載せらるゝ基督教徒最初の婚禮は此處に執行せられたり。此時イエスは賓客の一人として此席にあり、初めて其奇蹟を行ひ給ひ、「謙遜なる水、神の權威に畏れ、口に己が神を告白し、自ら色を變じて、化して酒となりぬ」。又キリストは此處にて「其子病に罹りしカペナウンの大臣」に遇ひ、患者は二十哩の遠距離にありたるに拘らず、イエスは即ち之を愈し、且つ其父に對して「往なんぢの子は生るなり」と宣へり（約四〇四十六ー五十四）。又其心に詭譎なかりしナタナエルといふ

弟子は即ち此のカナの出身なり。(約一〇四十七、同二十一〇二)此地尙は古代の建物の廢墟の存するものあり。又稍近代文明風の建物のこれなきにもあらず。されどパレスチナ全國を通じて到る所、目に留まるが如く、此處にも亦節儉と淸潔と愉快とを欠く。希臘教會堂に至れば傳說に所謂る四五斗盛の石甕を見物するを得べし(約二〇六)。

(91) マグダラ

ガリラヤの海の西岸、ゲネサレの野の南東隅にメジデルといへる處あり、是れマグダラのマリアの誕生地なるマグダラなるべし。今より一千八百年以前にありては、大なる、繁昌なる邑なりしが、今日は僅かに二十戸ばかりの茅屋を見るに過ぎず。此の小家屋の四方には、古き基礎散亂し、又廢殘物、堆をなせり。邑外れの處に一の石造家屋の殘物あり、其嘗て美麗なりし證據歷々として存す。降雨節の後には屋內蚤と蠍と蜈蚣との煩ひありて、之に居住するに堪えず、由て其時には屋上に蒲と葦とを以て假小屋を搆ふるなり。昔しイエスはパンと魚との奇蹟を行ひ給ひし後、「人々を去しめ舟に登てマグダラの境に至り」

（太十五〇三十九）給ひしとは、聖書を讀む人の皆知れる所なり。

(92) テベリアの邑

ガリラヤの海の南端を距ると四哩にして一時は皇城たりしテベリアの市あり。是れ即ちバプテスマのヨハネを殺せしヘロデ、アンテパスがキリストの公然傳道に着手し給ふ數年前に設立する處なり。イエスは數回此の市の近傍まで至り給ひしとはあれど、其果して之れに入り給ひしとありや否やは確かならず。此市は從前埋葬地に充てたりし地の上に建設せしもの故、猶太人は之に入ることを肯んせざりき、是れ死体に觸るゝ時は、彼等は儀式上汚れたるものとなるとせしを以てなり。近代のテベリアは昔のテベリアほどには大ならず。石垣は一千八百三十七年の地震に罹り、殆んど毀れ落ちたる箇所もあり、當時市民の半

は難に遭ふて死滅したりしなり。人口は三千有餘にして、其中殆んど二千人は猶太人なり。希臘教會堂は湖畔に立てり、十字軍の頃の剏立にかゝり、一千八百六十九年再建する所なり。此地の猶太人埋葬地は近代の有名なる人を葬りし處にして、何國に行くも猶太人は其埋葬地を丁重にするが如く、此にても亦之を神聖地として尊崇す。邑の南、凡そ一哩ほどの處に温泉あり、想像によれば、僂痲質斯に奇効ありといふ。昔の邑の廢墟は湖畔に沿ふて幾町かの間に連亘す。

(93)カペナウンの古跡

キリスト紀元の初めにありては、カペナウンは盛大繁昌の市なりき。されど其名の現今に知らるゝは、全くイエスの此に在住し、此に傳道し給ひしに職由す。イエスはナザレに「長育て」られしなれどもカペナウンは他に秀でゝ殊に其の「故邑」なりしなり。此處にてイエスはマタイを撰び給へり（太九〇九）。此處にてイエスは百夫の長の僕と（太八〇五）、シモンの岳母と（太八〇十四）癱瘋患者と（太九〇二―九）、汚れたる鬼に憑れし人（可一〇二十三）とに奇跡を行ひ給へり。又此地の會堂に於て約翰傳第六章の一大教訓を説き給へり。又此地にて「藏たる寶」の譬「好眞珠を求むる商人」の譬、又「海に投網」の譬を此

地にて說き給へり。(太十三〇四十四―五十)。ア、斯くの如く高大なる恩顧を辱ふしながら、其の市民が執拗にイエスを拒絕し奉りたる結果、遂に審判を下されたるは、亦驚くに足らず。馬太傳十一章二十三、二十四兩節の預言は果して眞となり、今日に至るまで、その古跡すら尚は疑問の中にあり。

(94)ベテサイダの古跡

ベテサイダは實際コラジンとカペナウンに頗る近かりしなり。昔の大家は右の諸邑とテベリアとは、共に湖邊にありたりしと記載す。ベテサイダは元、「魚の家」と稱せられたり、是れ此の地の昔の住民の職業を表示するものなり。而して此地が五人の使徒の誕生地なるとは、何時までも我等の心に記臆せらるべきなり。ペテロとアンデレとヤコブとヨハネとピリポとは此處に其幼年時代を經過し、且つ漁夫として其生業を營みたりしなり、(太四〇十八―二十二、約一〇四十三、四十四)又此地は疑ひもなく多くの魚を網し得て弟子等を驚かし、之れと同時にキリストの神性を確信せしめたる場所なるべし。(路五〇四以下)。此

處よりヨルダンに至るまでの間は一寸一歩皆昔を懐はしめざるなく、旅行者は文字通りにイエスの足跡を履みつゝあるとを感ずるなり。されど「禍なる哉」といふ聲はベテサイダの上に落ちたり。ベテサイダは光を拒絶したるため、其姉妹たる諸邑と共に倒れたり。即ち聖書に曰く「あゝ禍なる哉コラジンよ噫禍なる哉ベテサイダよ爾曹の中に行し異能を若ツロとシドンに行しならば彼等は早く麻をき灰を蒙りて悔改しなるべし」と（太十一〇二十一）。

(95) カイザリヤ、ピリピ

此の村はヘルモン山の麓なる谷間に位す。キリストの時代にありては非常に樞要の都會なりしが、それより以後幾多の變遷を受けたり。大なる建物は悉く亡び失せ、現今はバニアス村と稱して戸數僅かに五六十と一二の商店と是れあるのみ。此村は異神パンを祀れるを以て最初はパニアム亦はパリアスと稱せられしが、ヘロデ大王の子、ピリポ之を擴張して且つ美觀を添へ、改稱してカイザリヤ、ピリピとなせり。それより後また羅馬皇帝子ロの名譽のため、子ロニアスと呼ぶとなれり。更に年を經て、またカイザリヤ、パニアスの名を以て知られしが、近代バニアスと稱するは即ち此の名を保存したるなり。カイザリ

ヤ、ピリピはイエスが此世にあり給ひし間に巡行し給ひたる北方の最極端地なり。バニアスに至りて最も床しく感ぜらるゝは殆んど一般の人々がキススト變貌の靈跡と認定する場所即ち是れなり。(太十七〇一以下)

(96)バニアスにあるヨルダン河の源

バニアスと共に見物すべき面白き場所の一は、此地にある大なる泉なり。これはヨルダン河の重もなる源の一なりとす。此に數多の細流相集まりて大なる池をなし、そこより可なりの大さなる小河となりて流れ出づ。泉より出づる水はバニアス附近の野と谷とを貫流するが故に、此の地方をして極めて膏腴ならしむ。其後に嶮しき赤色の石灰石の斷崖あり、此の斷崖の前に洞穴即ち岩窟あり、是れバニアム即ち異神パンの神殿にして邑の名は之れに由來するなり。岩の前に一個の壁龕見ゆ之れに希臘語の銘ありて、此の巘の歷史を記述せり。ヘロデ大王この斷崖の頂上にアウガスタスの名譽のため、白色大理石の美麗な

る宮殿を建築したり。此の宮殿の殘物は巖の內に埋め込まれしが、只その一片碎の岩にかゝれるものあり、これは回教の一聖徒に献呈したるものなり。

(97) ヘルモン山

ヘルモンといふ名は秀高の義、果して此山はパレステナの北方を通行する旅客に取りて極めて目に付き易きものなりとす。されど此の雪を戴ける山巓に登ることを企てたるものは、古來甚だ稀なり。此の山には三の峰あり、其距離各々一哩の四分の一ばかりなり。元來此山はレバノンと相對峙せる一連山の南端にして其麓には北方の市たるダンあり、又ヨルダンの泉あり。海面を拔くこと大凡そ一万呎、其巓きよりは能くパレステナ全土を見るべく、地中海よりしてガリラヤの海に至るまで一眸の中に集まる。此處に昔の禮拜所の廢墟あり、想像によればイスラエル人が偶像バアルの禮拜に充てし高き處の一なるべしといふ。ヘ

ルモンの露は一種特別にして其量また多し（詩百三十三〇三）。旅客若し天幕と毛布を以てするも、尚は之が濕潤を防ぐに足らず。ヘルモンは主の變貌の古跡ありとは多くの人の主張する所（太十七〇二以下）、是れ主の變貌の記事は、カイザリヤ、ピリピに赴き給ひし時の記事と相續き、而してヘルモン山は此のカイザリヤ、ピリピに近ければなり。

(98) ダマスコの遠景

人若し遠山よりして此の愛らしき一地の景を臨み見ば、即ち必ず先づ感ずるならん、我は今世界の最舊都を眺望しつゝあるものなりと。げにダマスコは此の尊稱を受くるに足るたけの權利ありと見へたり。キリストの紀元に先づ二千年前、アブラハムの時代に此のダマスコは夙くも已に有名の場所たりしなり。即ちアブラハムいふ「此ダマスコのエリエゼル我が家の相續者なり」と（創十五〇二）。されど此の古きを感ずるに次で、軈て亦一層強く其の景色の美を感ずべし。即ち人之をヘルモン若しくはレバノンより遠望するにしても、或は亦其近傍より眺むるにしても、モハヌツトが一見して踵を旋らし、之に入るを嫌ひて

「楽園は一のみ、故に此世に於ては亦楽園に入らじ」といひしとの話の虚ならざるを悟るべし。此地開豁なる原野の中央にあり、アバナとバルバルの清流、（王下五〇）能く之れを灌漑す。今この圖は即ち其の西方より見たる景にして、此類の古き市には必要上多からざるを得ざる墳墓、累々として前景に見ゆ。

(99)ダマスコの近景

ダマスコは遠方よりして之を望めば、「エデンの園」と稱するも過言にあらざるの美觀を呈す。されど此の美は多くは是れ距離の貸したる美のみ、一たび其の狹隘なる、不規則なる街衢に足を入るれば、此美は消えて跡もなし。ダマスコは著しき東洋風の都會なり。西洋文明の風習を摸するの跡、一も見るべからず。燦爛たる新月を冠したる幾多の大理石の尖高塔は、先づ以て旅客の注意を惹くものたり。之に次で見ゆるものは、多くの白色の建物なり、近傍濃緑色の花園と相映じて最も美觀なり、以上は即ち此の市の重もなる形勢なり、以下即ち此の世界の最舊都と關係ある年代、古跡、人物に就て考ふると、自ら其自然